

2025 年度 学生実態調査結果

グループ間に差がみられたクロス集計結果

【抜粋】

実施時期:2025年9月22日から9月30日まで

調査対象:鎮西学院大学の全学部生

調査項目:別紙参照

調査方法:Googleフォームを使用

回答者数:490名

回答率:79.3%(休学中、除籍中の学生などは母数から除外した)

鎮西学院大学 IR 室

学年別調査概要

2025 年度学生実態調査のクロス集計結果について、学年・学科等による差が見受けられる項目を中心に抜粋し、考察を行った。2025 年度の回答者数は 490 名で、1 年 144 名、2 年 113 名、3 年 117 名、4 年 116 名である。本報告書では、授業評価、大学での学修経験、1 週間の過ごし方、身についた力、学生の印象・理解、生活・心理面を中心に分析した。

グループワークなどの機会

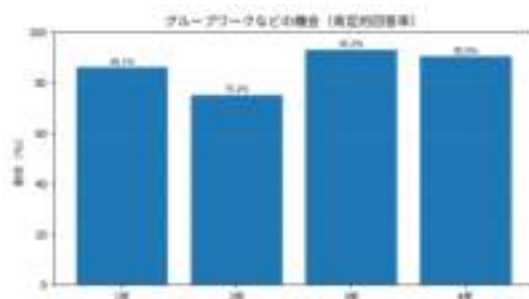


図1 グループワークなどの機会(授業の評価) [2025 年度]《学年別》 N=490

「グループワークやディスカッションの機会」は、肯定的回答が1年生 86.1%、2年生 75.2%、3年生 93.2%、4年生 90.5%であった。学年が上がるにつれて機会が顕著に増える傾向が示されていたが、2025 年度は1年生と3年生が比較的高く、2年生が低い。したがって、2025 年度は学年進行だけでは説明できず、科目構成や授業形態の違いも考慮する必要がある。

授業における質疑応答の機会

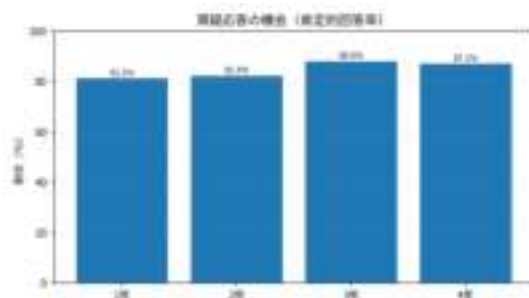


図2 質疑応答の機会(授業の評価) [2025 年度]《学年別》 N=490

「教員から意見を求められたり質疑応答をした機会」は、肯定的回答が1年生 81.2%、2年生 82.3%、3年生 88.0%、4年生 87.1%である。全学年で一定の水準が確保されているが、学年による差も確認できる。学生が受け身ではなく質問・発言する授業を全学年で安定して提供することが課題である。

英語による授業

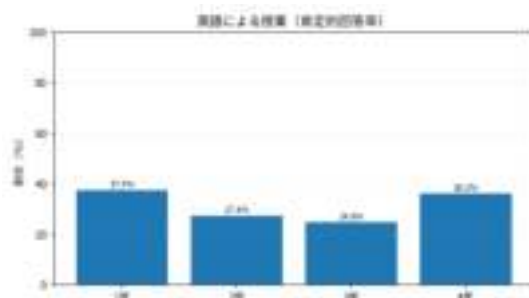


図3 英語による授業(授業の評価)[2025年度]《学年別》N=490

英語授業以外で英語が使われる機会について、「よくあった」「あるていどあった」の合計は1年生37.5%、2年生27.4%、3年生24.8%、4年生36.2%であった。特に3年生では24.8%にとどまり、学年差が大きい。英語授業の差が示されていたため、英語を専門としない学生にも無理なく参加できる英語活用型授業や国際的学修機会の拡充が検討課題である。

学外でのボランティア等の活動

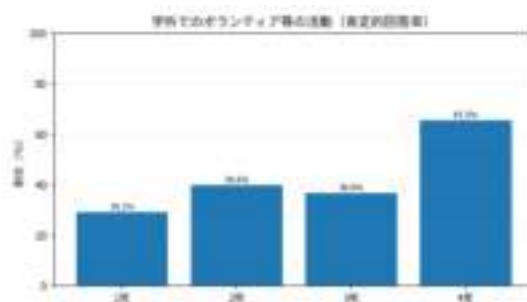


図4 学外でのボランティア等の活動[2025年度]《学年別》N=490

肯定的回答は1年生29.2%、2年生39.8%、3年生36.8%、4年生65.5%で、4年生が最も高い。2025年度も同様の方向性がみられるため、1・2年次から地域活動につながる導入的な機会を設けることが有効と考えられる。

大学での学修経験の有用性

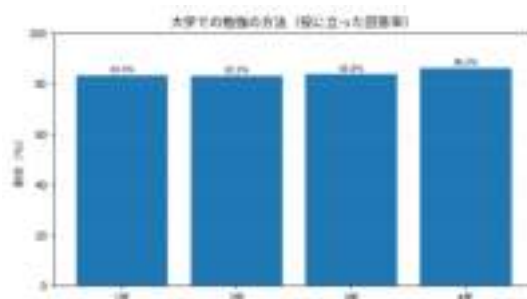


図5-1 大学での勉強の方法(役に立った程度)[2025年度]《学年別》

「大学での勉強の方法」について、「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、1年生83.3%、2年生83.2%、3年生83.8%、4年生86.2%であった。特にゼミでの少人数教育や他学生との学習は高い有用性が認められ、学生同士の相互学習を含む教育方法を継続する意義が大きい。

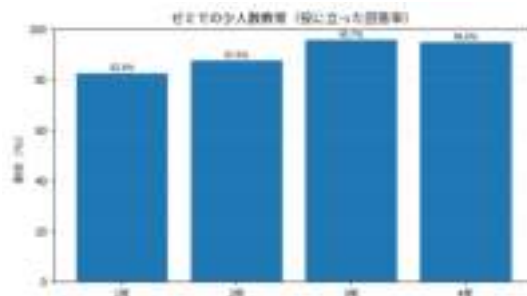


図5-2 ゼミでの少人数教育(役に立った程度)[2025年度]《学年別》

「ゼミでの少人数教育」について、「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、1年生82.6%、2年生87.6%、3年生95.7%、4年生94.8%であった。特にゼミでの少人数教育や他学生との学習は高い有用性が認められ、学生同士の相互学習を含む教育方法を継続する意義が大きい。

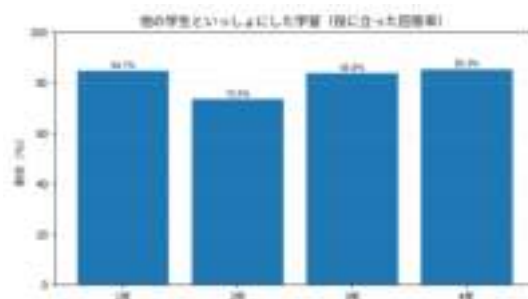


図 5-3 他の学生とひとしょにした学習（役に立った程度）[2025 年度]《学年別》

「他の学生とひとしょにした学習」について、「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、1 年生 84.7%、2 年生 73.5%、3 年生 83.8%、4 年生 85.3%であった。特にゼミでの少人数教育や他学生との学習は高い有用性が認められ、学生同士の相互学習を含む教育方法を継続する意義が大きい。

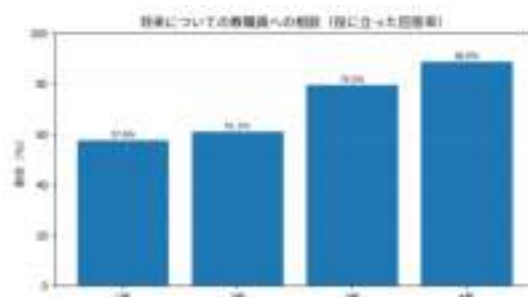


図 5-4 将来についての教職員への相談（役に立った程度）[2025 年度]《学年別》

「将来についての教職員への相談」について、「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、1 年生 57.6%、2 年生 61.1%、3 年生 79.5%、4 年生 88.8%であった。特にゼミでの少人数教育や他学生との学習は高い有用性が認められ、学生同士の相互学習を含む教育方法を継続する意義が大きい。

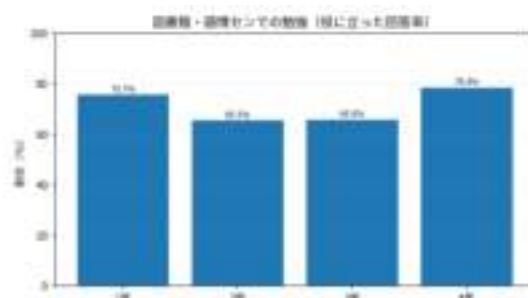


図 5-5 図書館・語情センでの勉強（役に立った程度）[2025 年度]《学年別》

「図書館・語情センでの勉強」について、「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、1 年生 75.7%、2 年生 65.5%、3 年生 65.8%、4 年生 78.4%であった。特にゼミでの少人数教育や他学生との学習は高い有用性が認められ、学生同士の相互学習を含む教育方法を継続する意義が大きい。

将来についての教職員への相談については、2025 年度は上級生ほど「役に立った」とする割合が高く、1 年生から 4 年生にかけて 27+56=83 名 (57.6%)から 52+51=103 名 (88.8%)へ上昇している。キャリア形成支援において教職員への相談機会が重要であることを示している。

週間の過ごし方

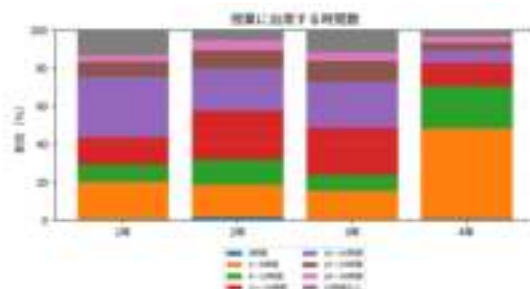


図 6-1 授業に出席する時間数(1 週間の過ごす時間) [2025 年度]《学年別》

授業出席時間には学年による分布差がみられる。履修科目数や卒業要件など学年固有の条件を踏まえて解釈する必要がある。



図 6-2 予習・復習の時間数(1 週間の過ごす時間) [2025 年度]《学年別》

予習・復習は全学年で「1～5 時間」が最も多く、1 年生 105 名 (72.9%)、2 年生 75 名 (66.4%)、3 年生 67 名 (57.3%)、4 年生 81 名 (69.8%) であった。授業外学修をより深い学びにつなげるため、課題の質、学修方法の提示、学修時間の確保を組み合わせる必要がある。

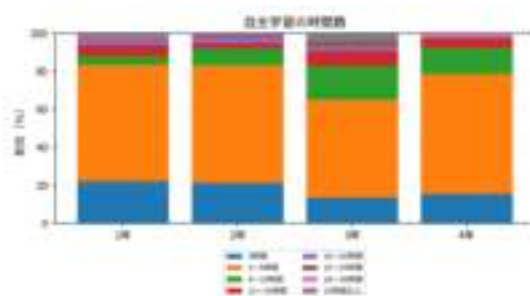


図 6-3 自主学習の時間数(1 週間の過ごす時間) [2025 年度]《学年別》

自主学習は「0 時間」と「1～5 時間」に集中している。0 時間の学生は 1 年生 22.2%、2 年生 21.2%、3 年生 13.7%、4 年生 15.5% であり、特に初年次における自主的な学修習慣の形成が課題である。

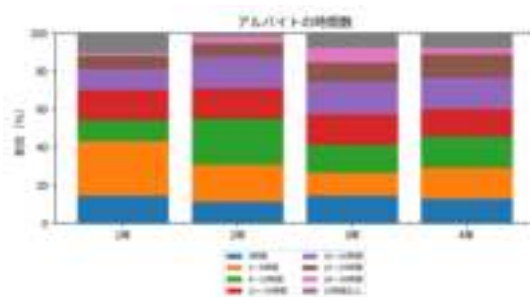


図 6-4 アルバイトの時間数(1 週間の過ごす時間) [2025 年度]《学年別》

アルバイト時間は学年による分布差がみられる。学業・就職活動・アルバイトの両立を考慮し、時間的負担が大きい学生にも学修支援を届かせることが重要である。

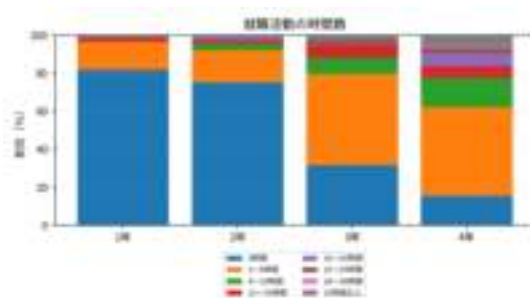


図 6-5 就職活動の時間数(1 週間の過ごす時間) [2025 年度]《学年別》

就職活動時間は学年進行に伴い増加する。0 時間の学生は 1 年生 81.9%、2 年生 75.2%、3 年生 31.6%、4 年生 15.5%であり、3・4 年生で就職活動が本格化している。早期からのキャリア支援が重要である。

身についた力

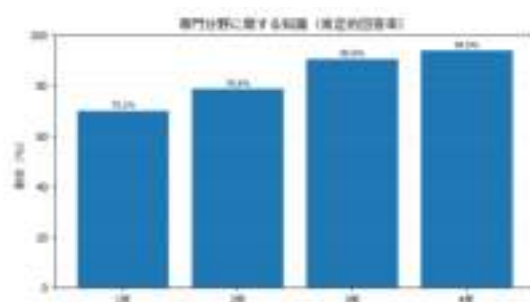


図 7-1 専門分野に関する知識(力の身についた程度) [2025 年度]《学年別》

専門分野に関する知識について「十分身についた」「ある程度身についた」と回答した割合は、1 年生 70.1%、2 年生 78.8%、3 年生 90.6%、4 年生 94.0%であった。4 年生の肯定的回答が高く、学年進行に伴う専門教育・ゼミ・就職活動等の経験の蓄積が学生の自己認識に反映されている可能性がある。

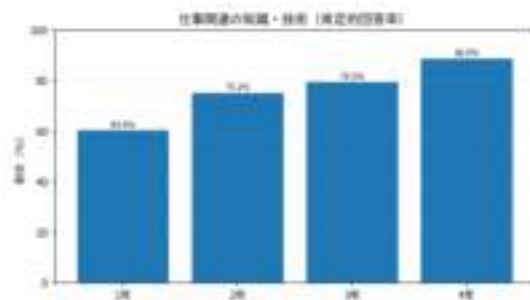


図 7-2 仕事関連の知識・技術(力の身についた程度) [2025 年度]《学年別》

仕事関連の知識・技術について「十分身についた」「ある程度身についた」と回答した割合は、1 年生 60.4%、2 年生 75.2%、3 年生 79.5%、4 年生 88.8%であった。4 年生の肯定的回答が高く、学年進行に伴う専門教育・ゼミ・就職活動等の経験の蓄積が学生の自己認識に反映されている可能性がある。

学生が持つ印象・理解

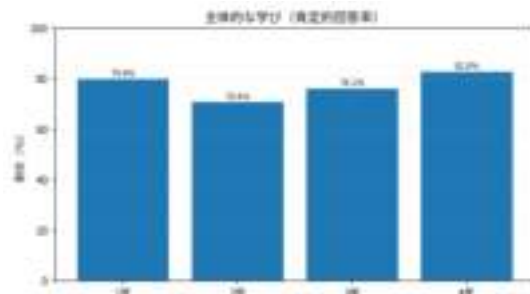


図 8 主体的な学び(学生が持つ印象や理解)〔2025 年度〕《学年別》

主体的な学びについて肯定的回答は1年生79.9%、2年生70.8%、3年生76.1%、4年生82.8%と、全学年で高い。学生自身が主体的に学ぶことの重要性を認識していることは、今後の教育改善に活用できる強みである。

将来・進路および経済的不安



図 9-1 将来や進路の不安〔2025 年度〕《学年別》

「不安を感じる」「とても不安を感じる」を合わせると、将来や進路の不安は1年生63.2%、2年生64.6%、3年生67.5%、4年生50.0%である。特に将来・進路不安は全学年で高く、キャリア形成支援を早期から継続的に行う必要性が示唆される。



図 9-2 経済的不安〔2025 年度〕《学年別》

「不安を感じる」「とても不安を感じる」を合わせると、経済的不安は1年生66.0%、2年生74.3%、3年生75.2%、4年生68.1%である。特に将来・進路不安は全学年で高く、キャリア形成支援を早期から継続的に行う必要性が示唆される。

2025 年度の主な特徴と改善課題

① 授業の基本的な明確性

授業の意義の説明、課題指示などは高く評価されており、2025 年度の強みといえる。

② 学生参加型授業の安定化

グループワークや質疑応答は一定程度確保されているが、学年差がある。授業間・学年間のばらつきを把握する必要がある。

③ 英語・国際的学修機会の拡充

英語による授業は相対的に低く、海外留学等も経験していない学生が多い。短期研修、留学生交流、英語活用型授業等の多様な選択肢が重要である。

④ 授業外学修の充実

予習・復習や自主学習が短時間層に集中している。授業内の学習を授業外の主体的学修へつなげる工夫が必要である。

⑤ キャリア支援の早期化

将来・進路不安が高く、就職活動時間は上級生で急増する。1・2年次からのキャリア教育・相談・インターンシップへの導線が望まれる。

⑥ 学科間の好事例共有

教育実践や学生の成長実感には学科差がみられる。各学科の優れた実践を全学的に共有することが有効である。

学年別総括

2025年度学生実態調査では、授業の意義の説明、課題指示、授業方法、ゼミや他学生との学習など、大学での学修を支える基礎的な教育環境について概ね肯定的な評価が確認できた。また、主体的な学びに対する学生の肯定的認識も高く、学生の学修意識を支える教育環境が形成されていることがうかがえる。

一方、英語による授業、学外活動、授業外の自主学習、将来・進路不安などには改善・支援の余地がある。2025年度は、対面授業、国際交流、地域活動、キャリア形成などを相互に結びつけ、学生の学修経験をより豊かなものにする事が重要である。

2025年度の経年変化を継続的に把握するとともに、学年・学科・日本人／留学生などのグループ間の差を分析し、その要因を検討することが望ましい。分析結果を授業改善、初年次教育、学修支援、国際交流、キャリア支援へ具体的に反映することが、学生の成長実感と学修成果の向上につながると考えられる。

学科別調査概要

- **グループワーク:** 肯定的回答は、社会福祉学科が 90.6%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 84.8%、経済政策学科が 83.6%であった。最高値と最低値の差は 7.0 ポイントであり、学科間の差が確認できる。
- **英語による授業:** 肯定的回答は、多文化コミュニケーション学科が 50.5%で最も高く、経済政策学科が 33.2%、社会福祉学科が 18.7%であった。最高値と最低値の差は 31.8 ポイントであり、学科間の差が確認できる。
- **専門分野の知識:** 身についたとする割合は、社会福祉学科が 93.0%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 78.1%、経済政策学科が 76.6%であった。最高値と最低値の差は 16.3 ポイントであり、学科間の差が確認できる。
- **外国語力:** 身についたとする割合は、多文化コミュニケーション学科が 69.5%で最も高く、経済政策学科が 29.9%、社会福祉学科が 19.3%であった。最高値と最低値の差は 50.2 ポイントであり、学科間の差が確認できる。
- **異文化理解力:** 身についたとする割合は、多文化コミュニケーション学科が 92.4%で最も高く、経済政策学科が 81.8%、社会福祉学科が 69.0%であった。最高値と最低値の差は 23.4 ポイントであり、学科間の差が確認できる。
- **経済的不安:** 不安を感じる割合は、経済政策学科が 72.0%で最も高く、社会福祉学科が 71.9%、多文化コミュニケーション学科が 65.7%であった。最高値と最低値の差は 6.2 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

主要項目を見ると、学科の教育分野と整合する差が現れている項目がある一方、授業運営や学修支援のように全学的に改善可能な項目にも差がみられる。以下では、各グラフについて数値の違いを個別に確認し、差の大きさと教育上の含意を記述する。

授業の評価

授業設計、課題提示、学生参加、英語活用、学外活動等について、学生が授業内外でどの程度経験したかを学科別に比較する。

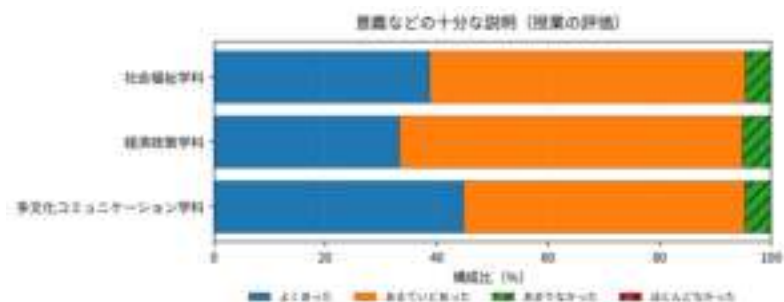


図1 意義などの十分な説明(授業の評価) [2025 年度]《学科別》

社会福祉学科が 95.3%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 95.2%、経済政策学科が 94.9%であった。最高値と最低値の差は 0.5 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 44.8%、社会福祉学科 38.6%、経済政策学科 33.2%である。

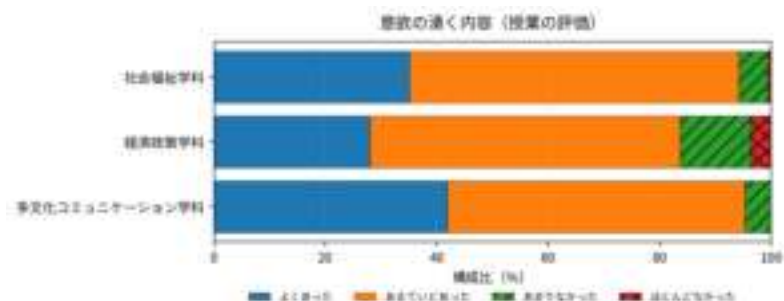


図2 意欲の湧く内容(授業の評価) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 95.2%で最も高く、社会福祉学科が 94.2%、経済政策学科が 83.6%であった。最高値と最低値の差は 11.6 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 41.9%、社会福祉学科 35.1%、経済政策学科 28.0%である。

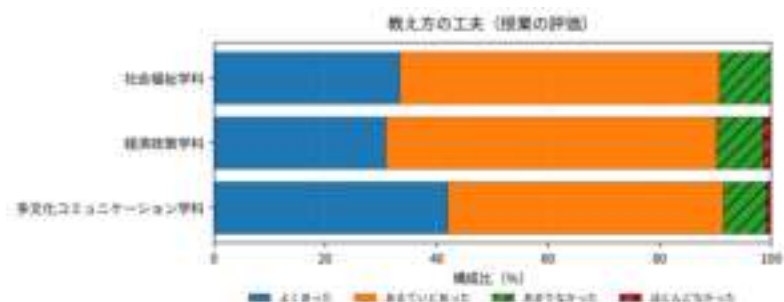


図3 教え方の工夫(授業の評価) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 91.4%で最も高く、社会福祉学科が 90.6%、経済政策学科が 90.2%であった。最高値と最低値の差は 1.2 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 41.9%、社会福祉学科 33.3%、経済政策学科 30.8%である。

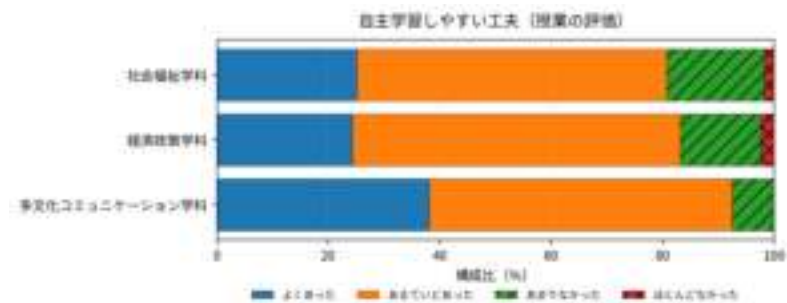


図4 自主学習しやすい工夫(授業の評価) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 92.4%で最も高く、経済政策学科が 83.2%、社会福祉学科が 80.7%であった。最高値と最低値の差は 11.7 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 38.1%、社会福祉学科 25.1%、経済政策学科 24.3%である。

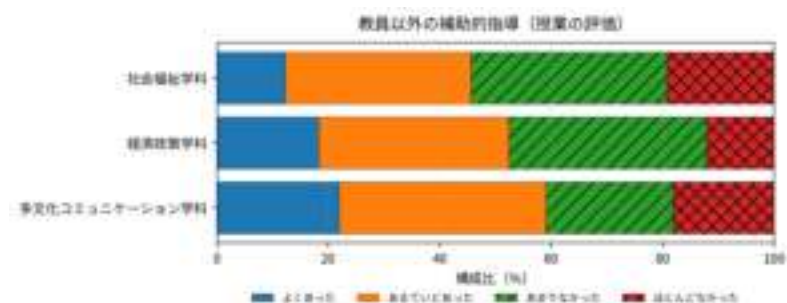


図5 教員以外の補助的指導(授業の評価) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 59.0%で最も高く、経済政策学科が 52.3%、社会福祉学科が 45.6%であった。最高値と最低値の差は 13.4 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 21.9%、経済政策学科 18.2%、社会福祉学科 12.3%である。

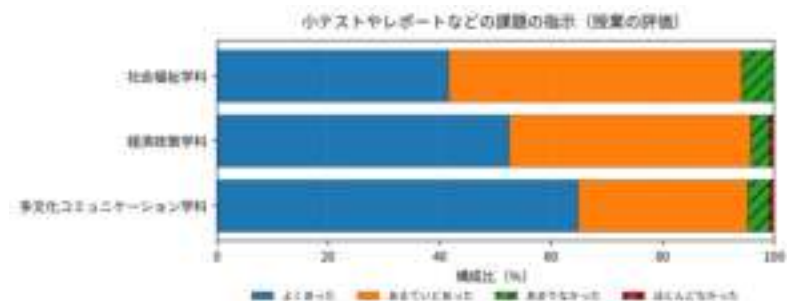


図6 小テストやレポートなどの課題の指示(授業の評価) [2025 年度]《学科別》

経済政策学科が 95.8%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 95.2%、社会福祉学科が 94.2%であった。最高値と最低値の差は 1.6 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 64.8%、経済政策学科 52.3%、社会福祉学科 41.5%である。

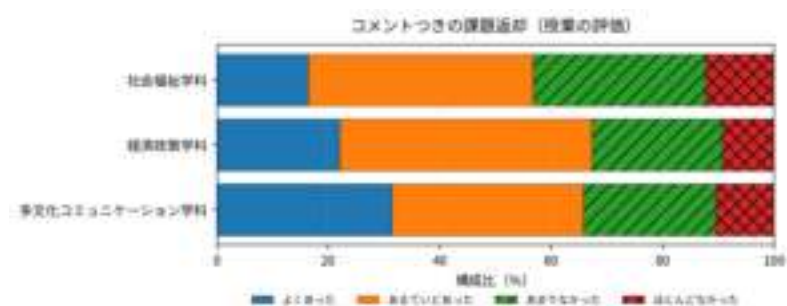


図7 コメント付きの課題返却(授業の評価) [2025 年度]《学科別》

経済政策学科が 67.3%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 65.7%、社会福祉学科が 56.7%であった。最高値と最低値の差は 10.6 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 31.4%、経済政策学科 22.0%、社会福祉学科 16.4%である。

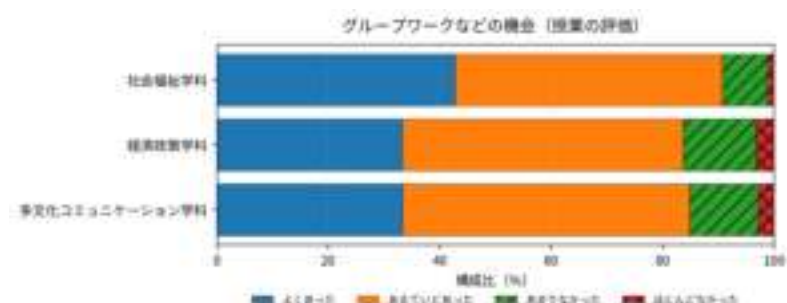


図8 グループワークなどの機会(授業の評価) [2025 年度]《学科別》

社会福祉学科が 90.6%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 84.8%、経済政策学科が 83.6%であった。最高値と最低値の差は 7.0 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、社会福祉学科 42.7%、多文化コミュニケーション学科 33.3%、経済政策学科 33.2%である。

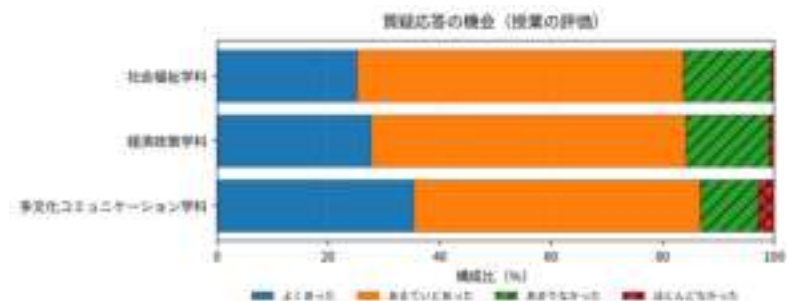


図9 質疑応答の機会(授業の評価) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 86.7%で最も高く、経済政策学科が 84.1%、社会福祉学科が 83.6%であった。最高値と最低値の差は 3.0 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 35.2%、経済政策学科 27.6%、社会福祉学科 25.1%である。

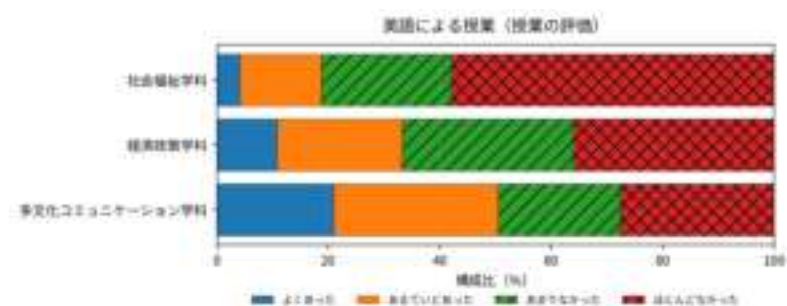


図 10 英語による授業(授業の評価) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 50.5%で最も高く、経済政策学科が 33.2%、社会福祉学科が 18.7%であった。最高値と最低値の差は 31.8 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 21.0%、経済政策学科 10.7%、社会福祉学科 4.1%である。

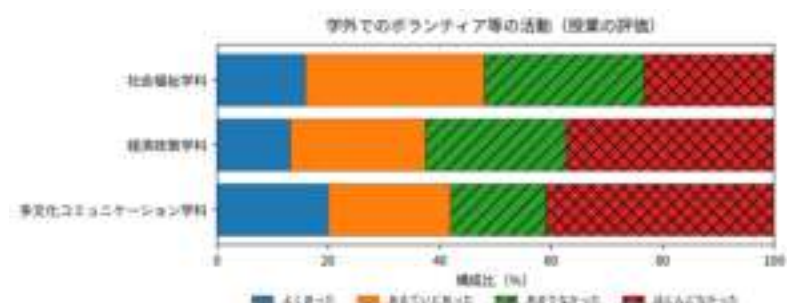


図 11 学外でのボランティア等の活動(授業の評価) [2025 年度]《学科別》

社会福祉学科が 48.0%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 41.9%、経済政策学科が 37.4%であった。最高値と最低値の差は 10.6 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 20.0%、社会福祉学科 15.8%、経済政策学科 13.1%である。

役に立った程度

大学で経験した学修・相談・国際交流等が学生にとってどの程度役に立ったか、同時に経験機会がどこまで広がっているかを検討する。

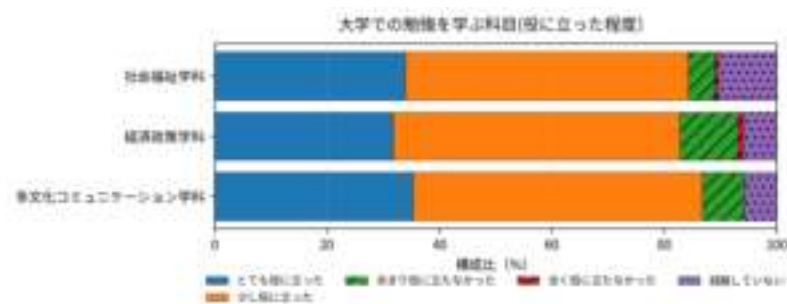


図 12 大学での勉強を学ぶ科目(役に立った程度) [2025 年度]《学科別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、多文化コミュニケーション学科が 86.7%で最も高く、社会福祉学科が 84.2%、経済政策学科が 82.7%であった。最高値と最低値の差は 4.0 ポイントであり、学科間の差が確認できる。一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、多文化コミュニケーション学科 94.3%、経済政策学科 93.9%、社会福祉学科 89.5%である。

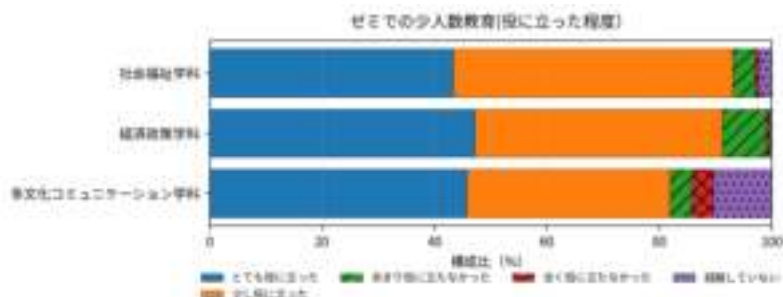


図 13 ゼミでの少人数教育(役に立った程度) [2025 年度]《学科別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、社会福祉学科が 93.0%で最も高く、経済政策学科が 91.1%、多文化コミュニケーション学科が 81.9%であった。最高値と最低値の差は 11.1 ポイントであり、学科間の差が確認できる。一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、経済政策学科 99.5%、社会福祉学科 97.7%、多文化コミュニケーション学科 89.5%である。

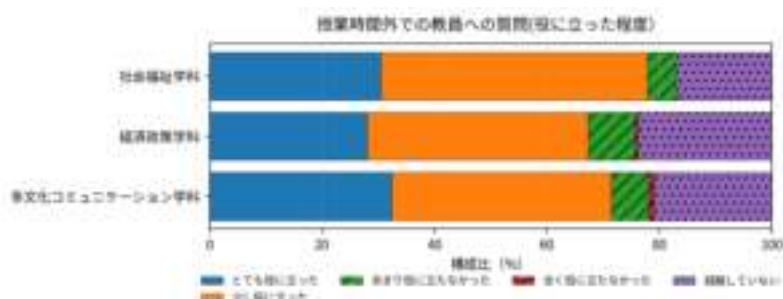


図 14 授業時間外での教員への質問(役に立った程度) [2025 年度]《学科別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、社会福祉学科が 77.8%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 71.4%、経済政策学科が 67.3%であった。最高値と最低値の差は 10.5 ポイントであり、学科間の差が確認できる。一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、社会福祉学科 83.0%、多文化コミュニケーション学科 79.0%、経済政策学科 76.2%である。

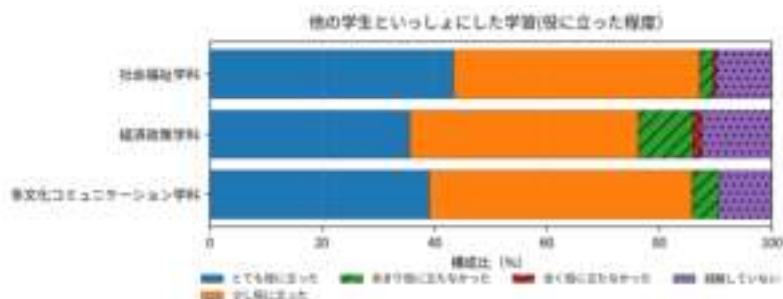


図 15 他の学生といっしょにした学習(役に立った程度) [2025 年度]《学科別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、社会福祉学科が 87.1%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 85.7%、経済政策学科が 76.2%であった。最高値と最低値の差は 11.0 ポイントであり、学科間の差が確認できる。一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、多文化コミュニケーション学科 90.5%、社会福祉学科 90.1%、経済政策学科 87.4%である。

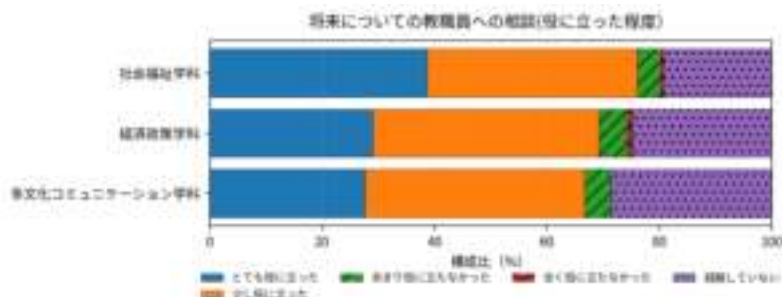


図16 将来についての教職員への相談(役に立った程度) [2025年度]《学科別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、社会福祉学科が76.0%で最も高く、経済政策学科が69.2%、多文化コミュニケーション学科が66.7%であった。最高値と最低値の差は9.4ポイントであり、学科間の差が確認できる。一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、社会福祉学科80.7%、経済政策学科75.2%、多文化コミュニケーション学科71.4%である。

。

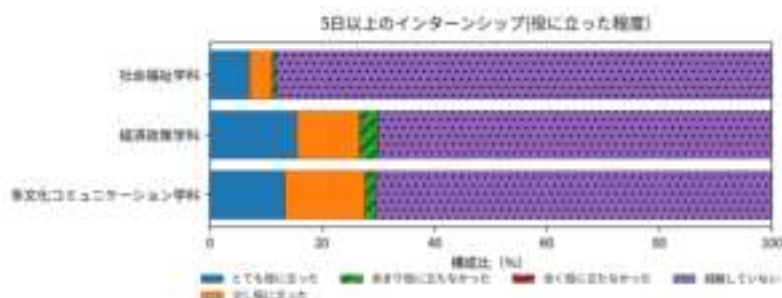


図17 5日以上のインターンシップ(役に立った程度) [2025年度]《学科別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、多文化コミュニケーション学科が27.6%で最も高く、経済政策学科が26.6%、社会福祉学科が11.1%であった。最高値と最低値の差は16.5ポイントであり、学科間の差が確認できる。一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、経済政策学科29.9%、多文化コミュニケーション学科29.5%、社会福祉学科11.7%である。

インターンシップは「経験していない」の割合が大きくなりやすい項目であり、経験者の評価だけでなく、参加機会の不足や学年構成の影響を考慮する必要がある。キャリア教育との接続、参加時期、情報提供の方法を学科ごとに点検することが有効である。

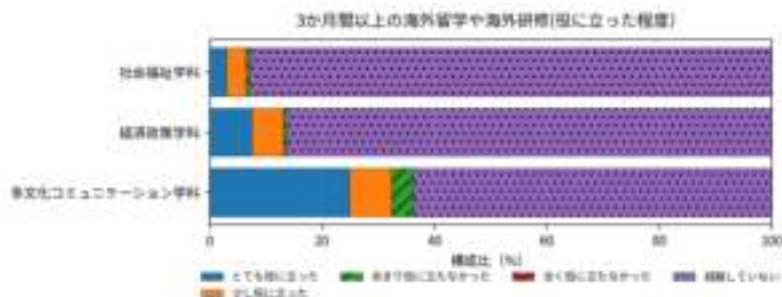


図18 3か月間以上の海外留学や海外研修(役に立った程度) [2025年度]《学科別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、多文化コミュニケーション学科が32.4%で最も高く、経済政策学科が13.1%、社会福祉学科が6.4%であった。最高値と最低値の差は25.9ポイントであり、学科間の差が確認できる。一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、多文化コミュニケーション学科36.2%、経済政策学科13.6%、社会福祉学科7.0%である。

。

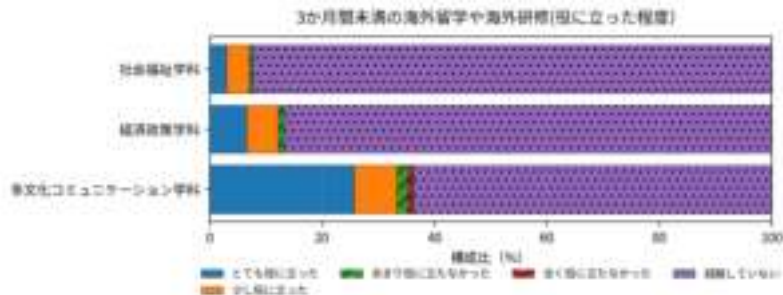


図19 3か月間未満の海外留学や海外研修(役に立った程度) [2025 年度]《学科別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、多文化コミュニケーション学科が 33.3%で最も高く、経済政策学科が 12.1%、社会福祉学科が 7.0%であった。最高値と最低値の差は 26.3 ポイントであり、学科間の差が確認できる。一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、多文化コミュニケーション学科 36.2%、経済政策学科 13.1%、社会福祉学科 7.6%である。

。

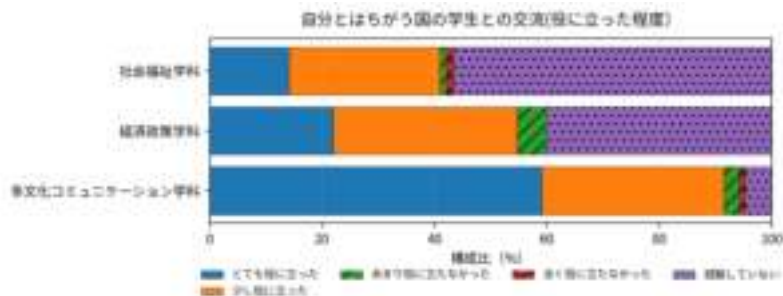


図20 自分とはちがう国の学生との交流(役に立った程度) [2025 年度]《学科別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、多文化コミュニケーション学科が 91.4%で最も高く、経済政策学科が 54.7%、社会福祉学科が 40.9%であった。最高値と最低値の差は 50.5 ポイントであり、学科間の差が確認できる。一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、多文化コミュニケーション学科 95.2%、経済政策学科 59.8%、社会福祉学科 43.3%である。

。

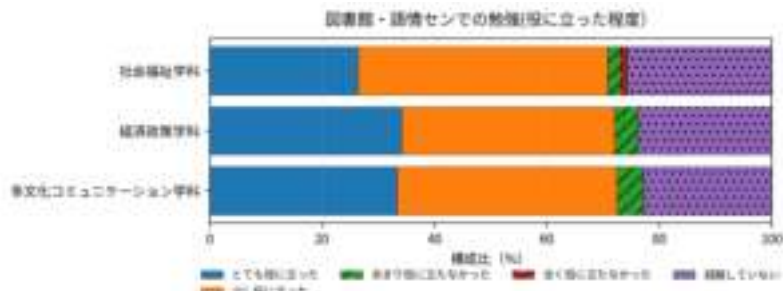


図21 図書館・語情センでの勉強(役に立った程度) [2025 年度]《学科別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、多文化コミュニケーション学科が 72.4%で最も高く、経済政策学科が 72.0%、社会福祉学科が 70.8%であった。最高値と最低値の差は 1.6 ポイントであり、学科間の差が確認できる。一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、多文化コミュニケーション学科 77.1%、経済政策学科 76.2%、社会福祉学科 74.3%である。

。

1 週間の過ごす時間

授業、授業外学修、課外活動、アルバイト、就職活動、交友、スマートフォン利用の時間配分から、学修と生活の構造を学科別に確認する。

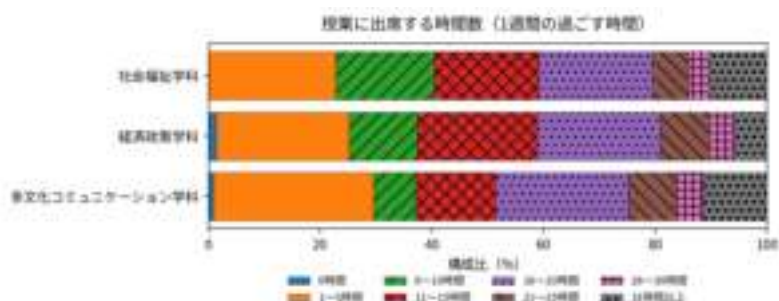


図 22 授業に出席する時間数(1 週間の過ごす時間) [2025 年度] 《学科別》

社会福祉学科「1～5 時間」22.8%、経済政策学科「1～5 時間」23.8%、多文化コミュニケーション学科「1～5 時間」28.6%である。時間配分が中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、経済政策学科 1.4%、多文化コミュニケーション学科 1.0%、社会福祉学科 0.0%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。

11 時間以上の割合を合計すると、多文化コミュニケーション学科 62.9%、経済政策学科 62.6%、社会福祉学科 59.6%である。

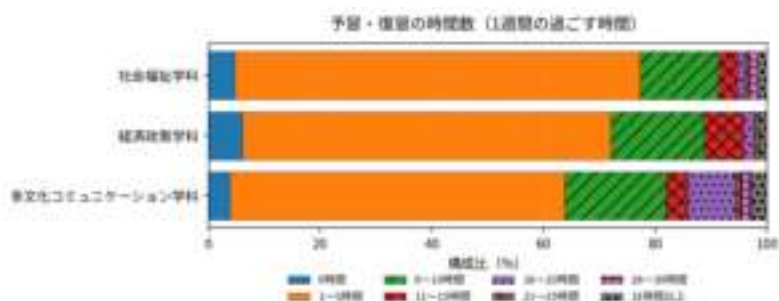


図 23 予習・復習の時間数(1 週間の過ごす時間) [2025 年度] 《学科別》

社会福祉学科「1～5 時間」72.5%、経済政策学科「1～5 時間」65.9%、多文化コミュニケーション学科「1～5 時間」60.0%である。時間配分が中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、経済政策学科 6.1%、社会福祉学科 4.7%、多文化コミュニケーション学科 3.8%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。

11 時間以上の割合を合計すると、多文化コミュニケーション学科 18.1%、経済政策学科 11.2%、社会福祉学科 8.8%である。

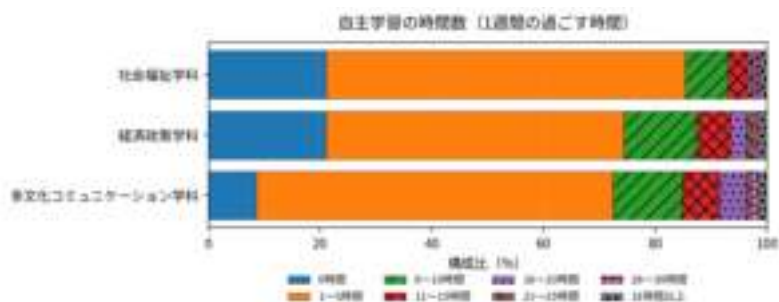


図 24 自主学習の時間数(1 週間の過ごす時間) [2025 年度] 《学科別》

社会福祉学科「1～5 時間」64.3%、経済政策学科「1～5 時間」53.3%、多文化コミュニケーション学科「1～5 時間」63.8%である。時間配分が中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、社会福祉学科 21.1%、経済政策学科 21.0%、多文化コミュニケーション学科 8.6%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。
11 時間以上の割合を合計すると、多文化コミュニケーション学科 15.2%、経済政策学科 12.6%、社会福祉学科 7.0%である。

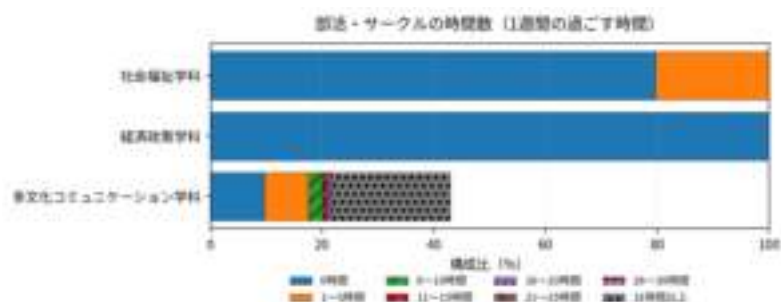


図 25 部活・サークルの時間数(1 週間の過ごす時間) [2025 年度]《学科別》

、社会福祉学科「31 時間以上」144.9%、経済政策学科「31 時間以上」455.3%、多文化コミュニケーション学科「31 時間以上」21.4%である。時間配分が中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、経済政策学科 251.1%、社会福祉学科 79.7%、多文化コミュニケーション学科 9.6%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。

11 時間以上の割合を合計すると、経済政策学科 495.7%、社会福祉学科 154.2%、多文化コミュニケーション学科 22.9%である。

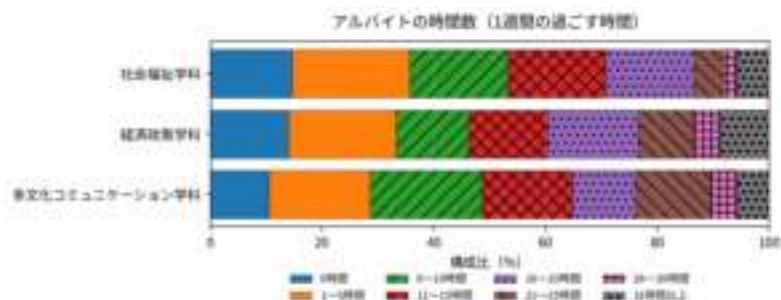


図 26 アルバイトの時間数(1 週間の過ごす時間) [2025 年度]《学科別》

、社会福祉学科「1～5 時間」21.1%、経済政策学科「1～5 時間」19.2%、多文化コミュニケーション学科「6～10 時間」20.0%である。時間配分が中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、社会福祉学科 14.6%、経済政策学科 14.0%、多文化コミュニケーション学科 10.5%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。

11 時間以上の割合を合計すると、経済政策学科 53.7%、多文化コミュニケーション学科 51.4%、社会福祉学科 46.8%である。

アルバイト時間が長い学生では、授業外学修や休養との競合が生じる可能性がある。経済的事情も関連し得るため、学科別の時間差は生活支援・履修支援とあわせて検討する必要がある。

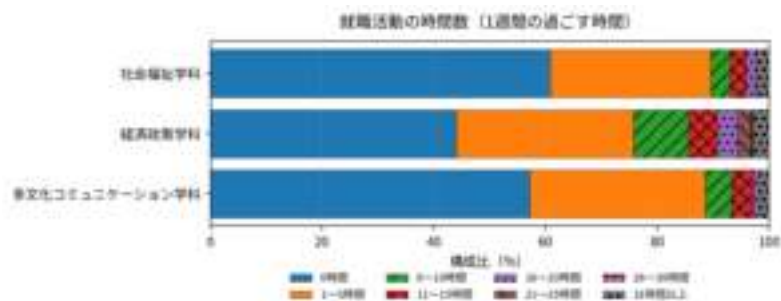


図 27 就職活動の時間数(1 週間の過ごす時間) [2025 年度]《学科別》

、社会福祉学科「0 時間」60.8%、経済政策学科「0 時間」43.9%、多文化コミュニケーション学科「0 時間」57.1%である。時間配分の中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、社会福祉学科 60.8%、多文化コミュニケーション学科 57.1%、経済政策学科 43.9%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。

11 時間以上の割合を合計すると、経済政策学科 14.5%、社会福祉学科 7.0%、多文化コミュニケーション学科 6.7%である。

就職活動時間は学年構成の影響を強く受けるため、学科差を直接的な支援成果の差とみなすことは適切ではない。学年別データも併用し、キャリア支援への接続時期や活動量の違いを確認することが必要である。

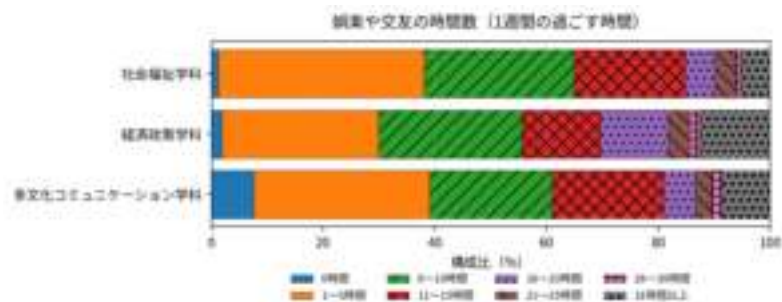


図 28 娯楽や交友の時間数(1週間の過ごす時間) [2025 年度]《学科別》

、社会福祉学科「1～5 時間」36.8%、経済政策学科「1～5 時間」28.0%、多文化コミュニケーション学科「1～5 時間」31.4%である。時間配分の中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、多文化コミュニケーション学科 7.6%、経済政策学科 1.9%、社会福祉学科 1.2%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。

11 時間以上の割合を合計すると、経済政策学科 44.4%、多文化コミュニケーション学科 39.0%、社会福祉学科 35.1%である。

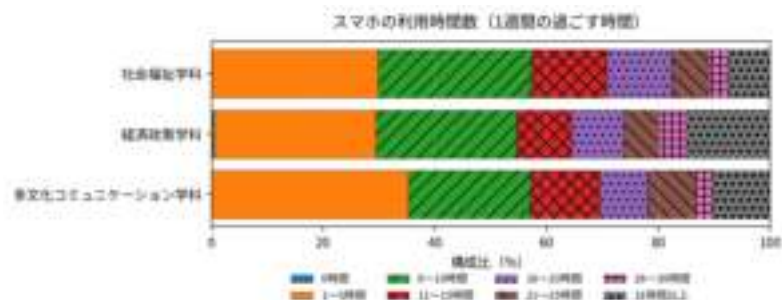


図 29 スマホの利用時間数(1週間の過ごす時間) [2025 年度]《学科別》

、社会福祉学科「1～5 時間」29.8%、経済政策学科「1～5 時間」29.0%、多文化コミュニケーション学科「1～5 時間」35.2%である。時間配分の中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、経済政策学科 0.5%、社会福祉学科 0.0%、多文化コミュニケーション学科 0.0%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。

11 時間以上の割合を合計すると、経済政策学科 45.3%、多文化コミュニケーション学科 42.9%、社会福祉学科 42.7%である。

力の身について程度

専門知識、汎用的能力、外国語、データサイエンス、問題解決、異文化理解、コミュニケーション等の自己評価を学科別に比較する。

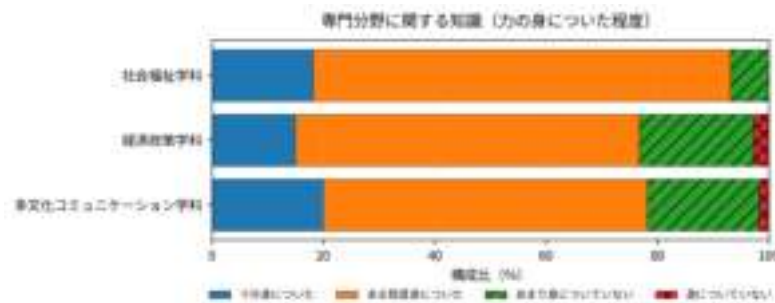


図 30 専門分野に関する知識(力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

社会福祉学科が 93.0%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 78.1%、経済政策学科が 76.6%であった。最高値と最低値の差は 16.3 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 20.0%、社会福祉学科 18.1%、経済政策学科 15.0%である。

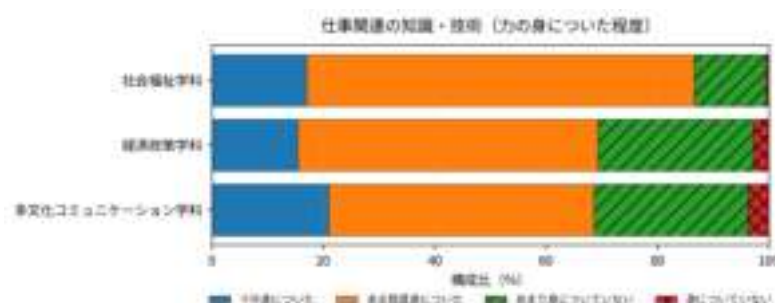


図 31 仕事関連の知識・技術(力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

社会福祉学科が 86.5%で最も高く、経済政策学科が 69.2%、多文化コミュニケーション学科が 68.6%であった。最高値と最低値の差は 18.0 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 21.0%、社会福祉学科 17.0%、経済政策学科 15.4%である。

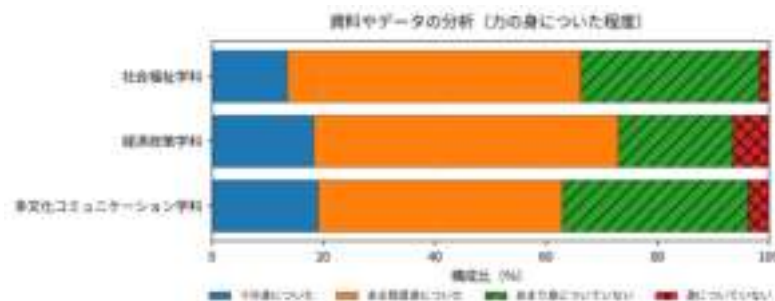


図 32 資料やデータの分析(力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

経済政策学科が 72.9%で最も高く、社会福祉学科が 66.1%、多文化コミュニケーション学科が 62.9%であった。最高値と最低値の差は 10.0 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 19.0%、経済政策学科 18.2%、社会福祉学科 13.5%である。

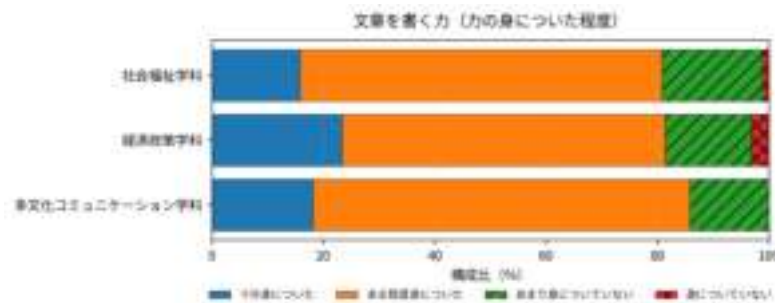


図 33 文章を書く力(力の身について程度) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 85.7%で最も高く、経済政策学科が 81.3%、社会福祉学科が 80.7%であった。最高値と最低値の差は 5.0 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身について」だけを見ると、経済政策学科 23.4%、多文化コミュニケーション学科 18.1%、社会福祉学科 15.8%である。

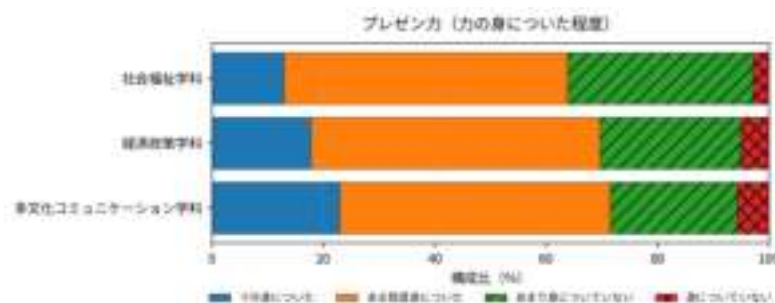


図 34 プレゼン力(力の身について程度) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 71.4%で最も高く、経済政策学科が 69.6%、社会福祉学科が 63.7%であった。最高値と最低値の差は 7.7 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身について」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 22.9%、経済政策学科 17.8%、社会福祉学科 12.9%である。

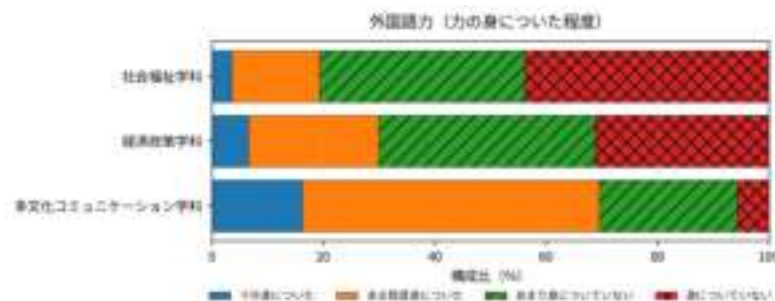


図 35 外国語力(力の身について程度) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 69.5%で最も高く、経済政策学科が 29.9%、社会福祉学科が 19.3%であった。最高値と最低値の差は 50.2 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身について」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 16.2%、経済政策学科 6.5%、社会福祉学科 3.5%である。

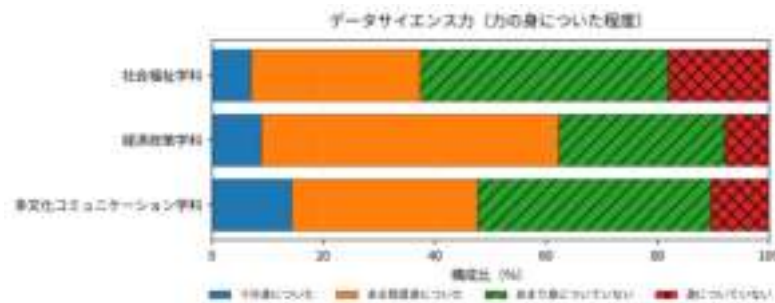


図 36 データサイエンス力(力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

経済政策学科が 62.1%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 47.6%、社会福祉学科が 37.4%であった。最高値と最低値の差は 24.7 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 14.3%、経済政策学科 8.9%、社会福祉学科 7.0%である。

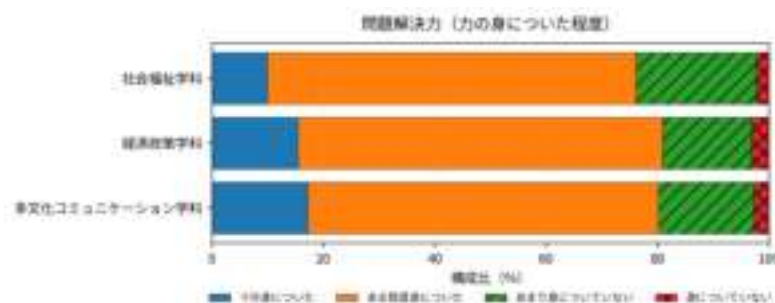


図 37 問題解決力(力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

経済政策学科が 80.8%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 80.0%、社会福祉学科が 76.0%であった。最高値と最低値の差は 4.8 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 17.1%、経済政策学科 15.4%、社会福祉学科 9.9%である。

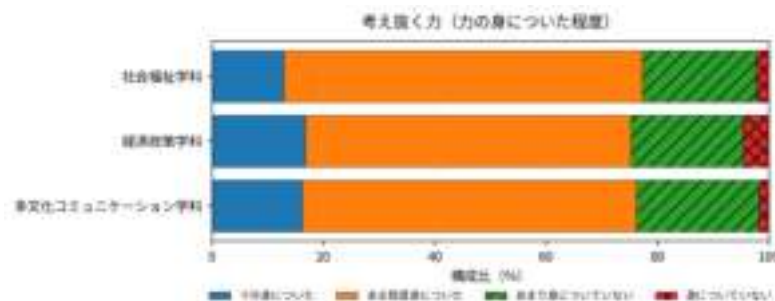


図 38 考え抜く力(力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

社会福祉学科が 77.2%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 76.2%、経済政策学科が 75.2%であった。最高値と最低値の差は 2.0 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、経済政策学科 16.8%、多文化コミュニケーション学科 16.2%、社会福祉学科 12.9%である。

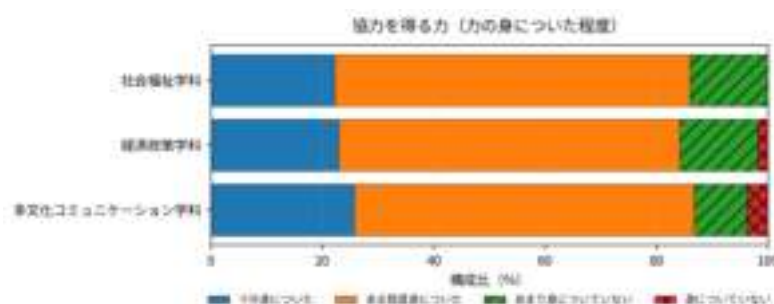


図 39 協力を得る力 (力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 86.7%で最も高く、社会福祉学科が 86.0%、経済政策学科が 84.1%であった。最高値と最低値の差は 2.6 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 25.7%、経済政策学科 22.9%、社会福祉学科 22.2%である。

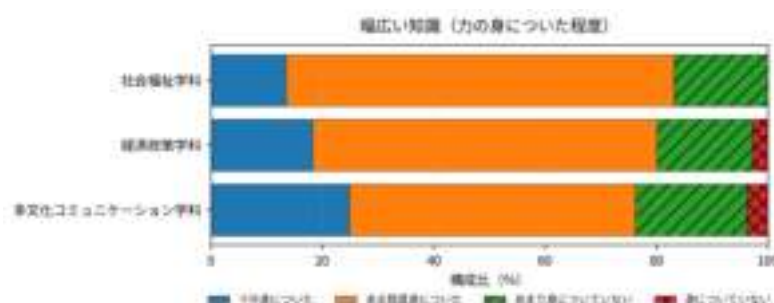


図 40 幅広い知識 (力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

社会福祉学科が 83.0%で最も高く、経済政策学科が 79.9%、多文化コミュニケーション学科が 76.2%であった。最高値と最低値の差は 6.9 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 24.8%、経済政策学科 18.2%、社会福祉学科 13.5%である。

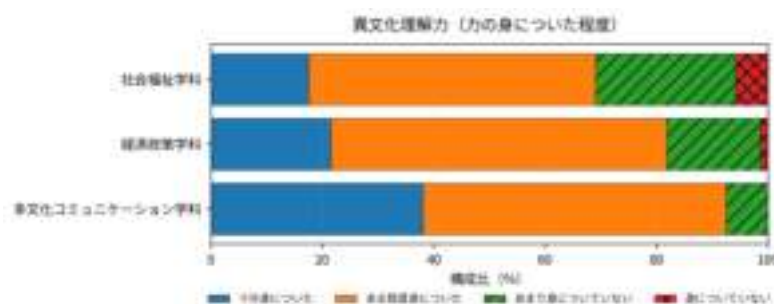


図 41 異文化理解力 (力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 92.4%で最も高く、経済政策学科が 81.8%、社会福祉学科が 69.0%であった。最高値と最低値の差は 23.4 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 38.1%、経済政策学科 21.5%、社会福祉学科 17.5%である。

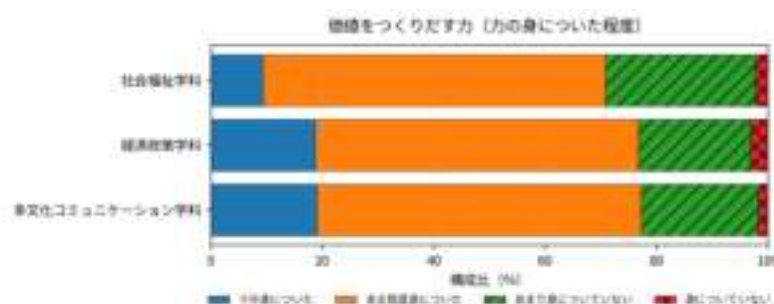


図 42 価値をつくりだす力(力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 77.1%で最も高く、経済政策学科が 76.6%、社会福祉学科が 70.8%であった。最高値と最低値の差は 6.4 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 19.0%、経済政策学科 18.7%、社会福祉学科 9.4%である。

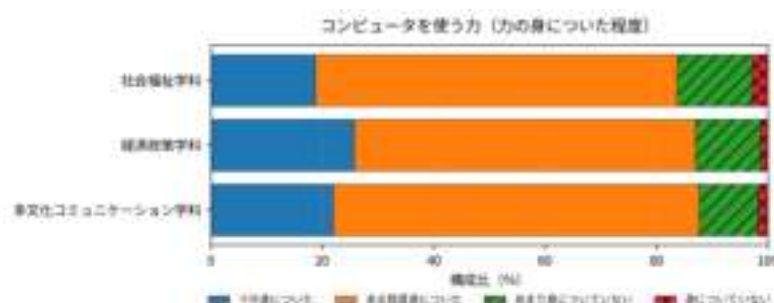


図 43 コンピュータを使う力(力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 87.6%で最も高く、経済政策学科が 86.9%、社会福祉学科が 83.6%であった。最高値と最低値の差は 4.0 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、経済政策学科 25.7%、多文化コミュニケーション学科 21.9%、社会福祉学科 18.7%である。

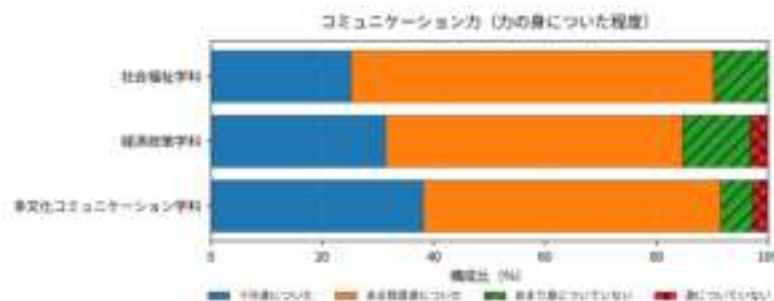


図 44 コミュニケーション力(力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 91.4%で最も高く、社会福祉学科が 90.1%、経済政策学科が 84.6%であった。最高値と最低値の差は 6.8 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 38.1%、経済政策学科 31.3%、社会福祉学科 25.1%である。

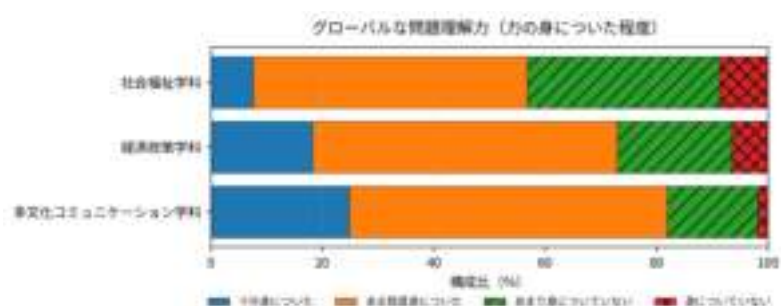


図 45 グローバルな問題理解力(力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 81.9%で最も高く、経済政策学科が 72.9%、社会福祉学科が 56.7%であった。最高値と最低値の差は 25.2 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 24.8%、経済政策学科 18.2%、社会福祉学科 7.6%である。

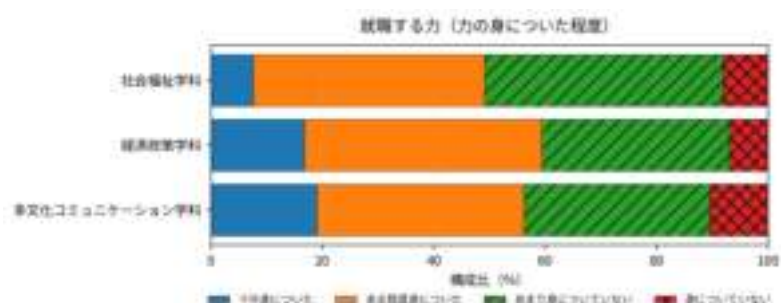


図 46 就職する力(力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

経済政策学科が 59.3%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 56.2%、社会福祉学科が 49.1%であった。最高値と最低値の差は 10.2 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 19.0%、経済政策学科 16.8%、社会福祉学科 7.6%である。

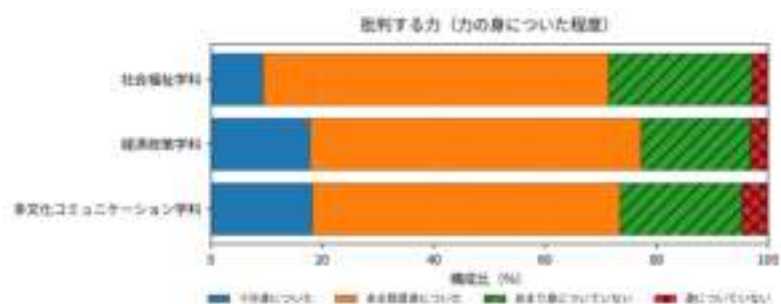


図 47 批判する力(力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

経済政策学科が 77.1%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 73.3%、社会福祉学科が 71.3%であった。最高値と最低値の差は 5.8 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 18.1%、経済政策学科 17.8%、社会福祉学科 9.4%である。

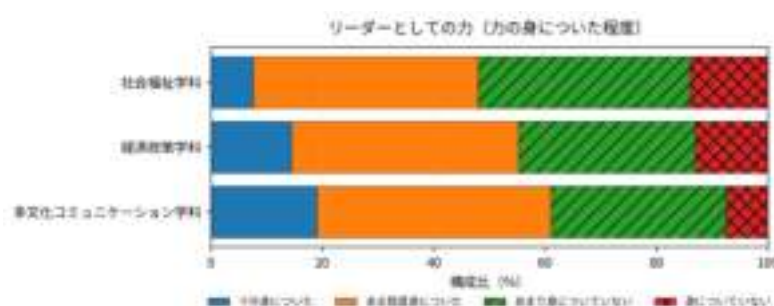


図 48 リーダーとしての力(力の身についた程度) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 61.0%で最も高く、経済政策学科が 55.1%、社会福祉学科が 48.0%であった。最高値と最低値の差は 13.0 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 19.0%、経済政策学科 14.5%、社会福祉学科 7.6%である。

大学での経験

オンライン利用、教員との関係、学修行動、出席・課題行動、将来相談等の実際の経験頻度を学科別に確認する。

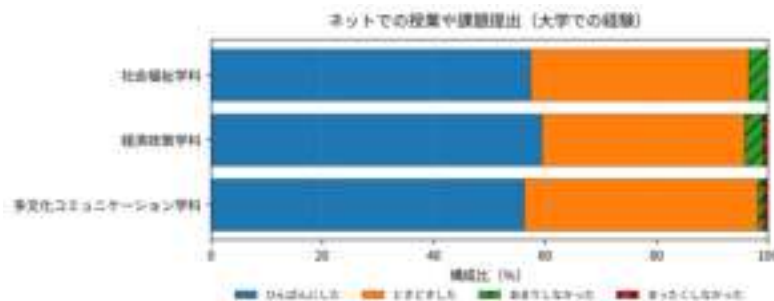


図 49 ネットでの授業や課題提出(大学での経験) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 98.1%で最も高く、社会福祉学科が 96.5%、経済政策学科が 95.8%であった。最高値と最低値の差は 2.3 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、経済政策学科 59.3%、社会福祉学科 57.3%、多文化コミュニケーション学科 56.2%である。

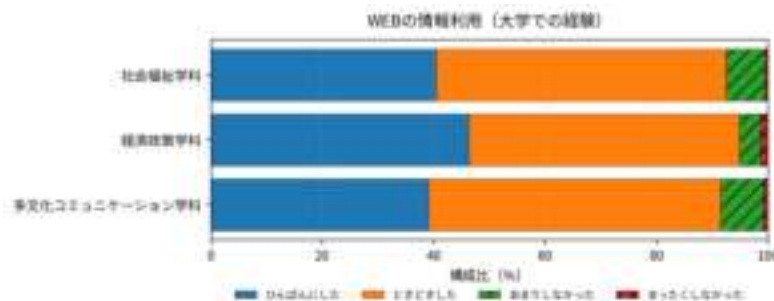


図 50 WEB の情報利用(大学での経験) [2025 年度]《学科別》

経済政策学科が 94.9%で最も高く、社会福祉学科が 92.4%、多文化コミュニケーション学科が 91.4%であった。最高値と最低値の差は 3.4 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、経済政策学科 46.3%、社会福祉学科 40.4%、多文化コミュニケーション学科 39.0%である。

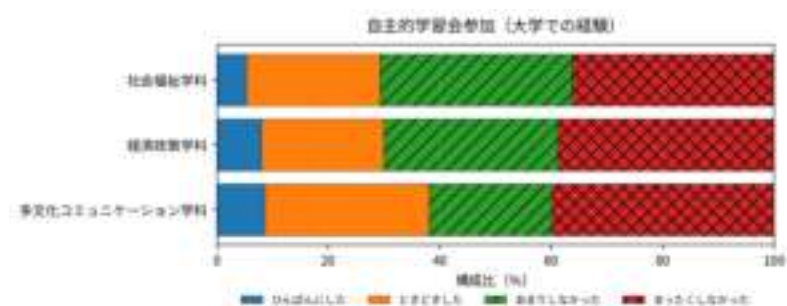


図 51 自主的学習会参加(大学での経験) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 38.1%で最も高く、経済政策学科が 29.9%、社会福祉学科が 29.2%であった。最高値と最低値の差は 8.9 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 8.6%、経済政策学科 7.9%、社会福祉学科 5.3%である。

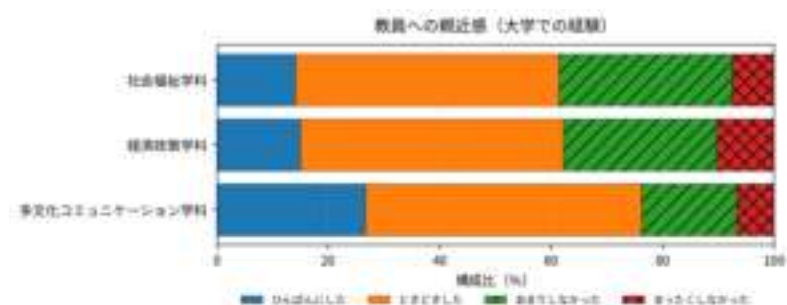


図 52 教員への親近感(大学での経験) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 76.2%で最も高く、経済政策学科が 62.1%、社会福祉学科が 61.4%であった。最高値と最低値の差は 14.8 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 26.7%、経済政策学科 15.0%、社会福祉学科 14.0%である。

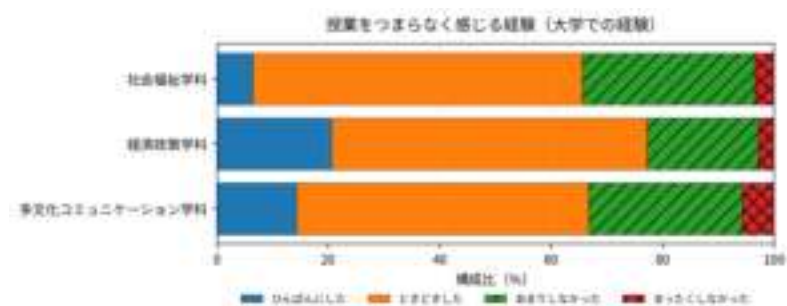


図 53 授業をつまらなく感じる経験(大学での経験) [2025 年度]《学科別》

経済政策学科が 77.1%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 66.7%、社会福祉学科が 65.5%であった。最高値と最低値の差は 11.6 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、経済政策学科 20.6%、多文化コミュニケーション学科 14.3%、社会福祉学科 6.4%である。

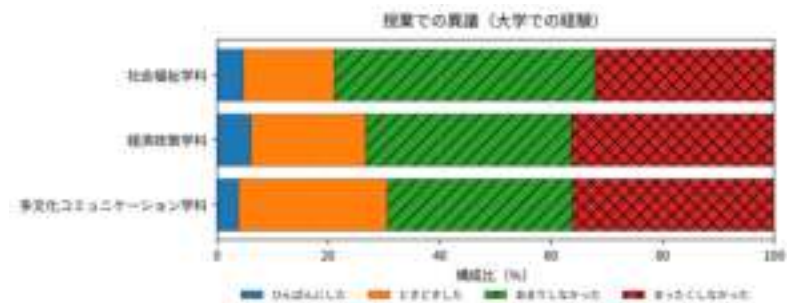


図 54 授業での異議(大学での経験) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 30.5%で最も高く、経済政策学科が 26.6%、社会福祉学科が 21.1%であった。最高値と最低値の差は 9.4 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、経済政策学科 6.1%、社会福祉学科 4.7%、多文化コミュニケーション学科 3.8%である。

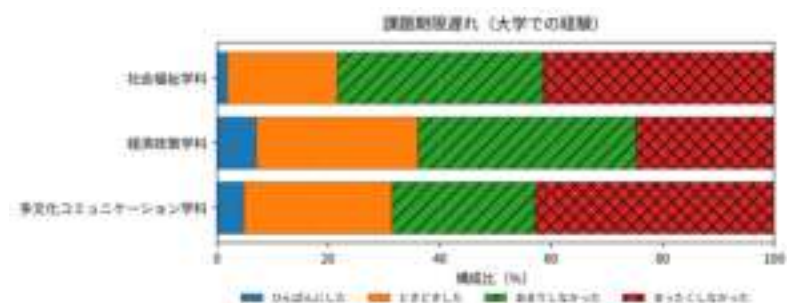


図 55 課題期限遅れ(大学での経験) [2025 年度]《学科別》

経済政策学科が 36.0%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 31.4%、社会福祉学科が 21.6%であった。最高値と最低値の差は 14.3 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、経済政策学科 7.0%、多文化コミュニケーション学科 4.8%、社会福祉学科 1.8%である。

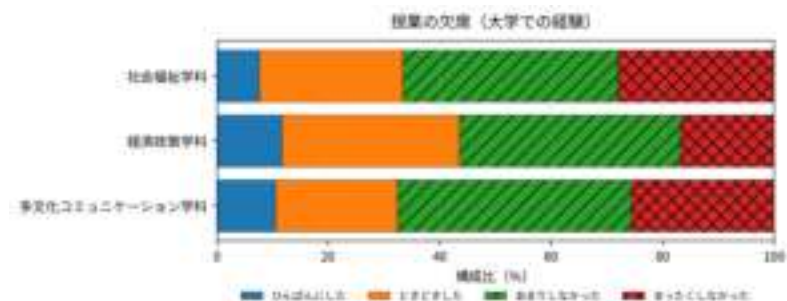


図 56 授業の欠席(大学での経験) [2025 年度]《学科別》

経済政策学科が 43.5%で最も高く、社会福祉学科が 33.3%、多文化コミュニケーション学科が 32.4%であった。最高値と最低値の差は 11.1 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、経済政策学科 11.7%、多文化コミュニケーション学科 10.5%、社会福祉学科 7.6%である。

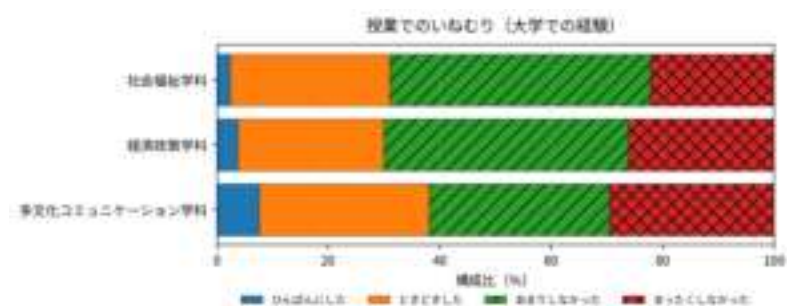


図 57 授業でのいねむり(大学での経験) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 38.1%で最も高く、社会福祉学科が 31.0%、経済政策学科が 29.9%であった。最高値と最低値の差は 8.2 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 7.6%、経済政策学科 3.7%、社会福祉学科 2.3%である。

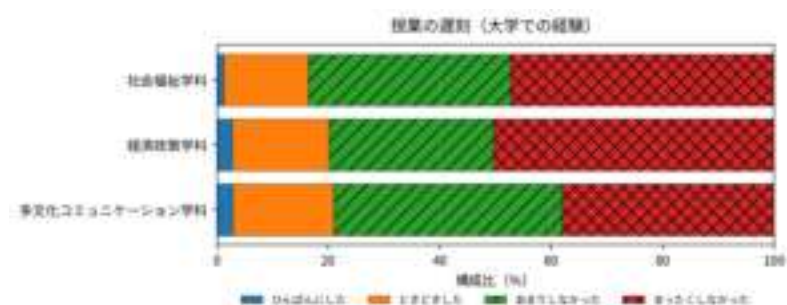


図 58 授業の遅刻(大学での経験) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 21.0%で最も高く、経済政策学科が 20.1%、社会福祉学科が 16.4%であった。最高値と最低値の差は 4.6 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 2.9%、経済政策学科 2.8%、社会福祉学科 1.2%である。

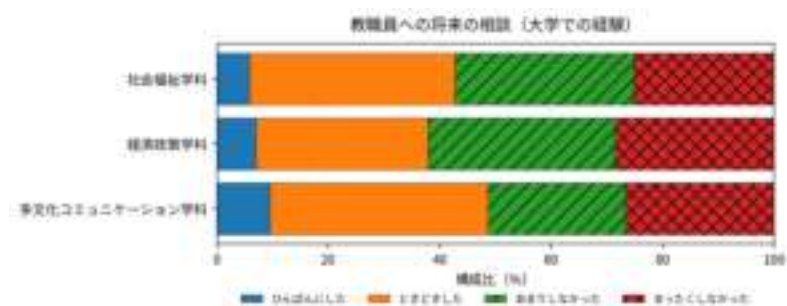


図 59 教職員への将来の相談(大学での経験) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 48.6%で最も高く、社会福祉学科が 42.7%、経済政策学科が 37.9%であった。最高値と最低値の差は 10.7 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 9.5%、経済政策学科 7.0%、社会福祉学科 5.8%である。

学生が持つ印象や理解

主体的学修、大学が求める力、大学の熱意、成長実感、将来イメージ、継続学修等について学生の認識を比較する。

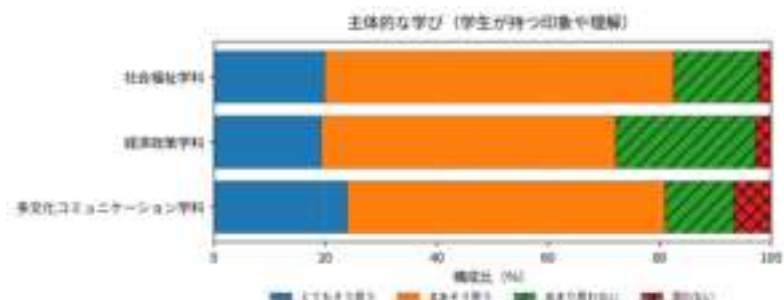


図 60 主体的な学び(学生が持つ印象や理解) [2025 年度]《学科別》

社会福祉学科が 82.5%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 81.0%、経済政策学科が 72.0%であった。最高値と最低値の差は 10.5 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「とてもそう思う」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 23.8%、社会福祉学科 19.9%、経済政策学科 19.2%である。

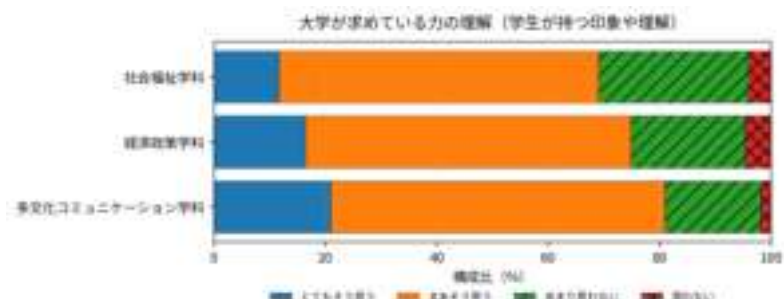


図 61 大学が求めている力の理解(学生が持つ印象や理解) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 81.0%で最も高く、経済政策学科が 74.8%、社会福祉学科が 69.0%であった。最高値と最低値の差は 11.9 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「とてもそう思う」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 21.0%、経済政策学科 16.4%、社会福祉学科 11.7%である。

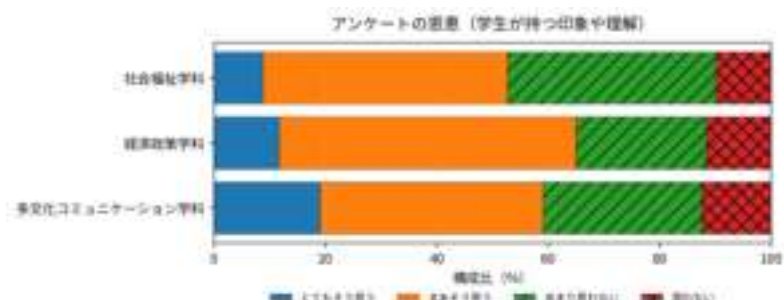


図 62 アンケートの恩恵(学生が持つ印象や理解) [2025 年度]《学科別》

経済政策学科が 65.0%で最も高く、多文化コミュニケーション学科が 59.0%、社会福祉学科が 52.6%であった。最高値と最低値の差は 12.3 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「とてもそう思う」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 19.0%、経済政策学科 11.7%、社会福祉学科 8.8%である。

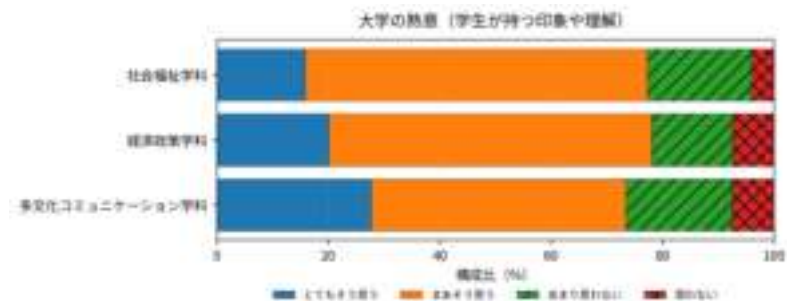


図 63 大学の熱意(学生が持つ印象や理解) [2025 年度]《学科別》

経済政策学科が 78.0%で最も高く、社会福祉学科が 77.2%、多文化コミュニケーション学科が 73.3%であった。最高値と最低値の差は 4.7 ポイントであり、学科間の差が確認できる。
より強い評価に当たる「とてもそう思う」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 27.6%、経済政策学科 20.1%、社会福祉学科 15.8%である。

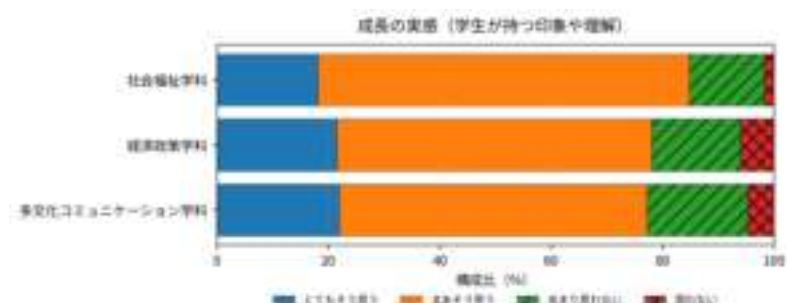


図 64 成長の実感(学生が持つ印象や理解) [2025 年度]《学科別》

社会福祉学科が 84.8%で最も高く、経済政策学科が 78.0%、多文化コミュニケーション学科が 77.1%であった。最高値と最低値の差は 7.7 ポイントであり、学科間の差が確認できる。
より強い評価に当たる「とてもそう思う」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 21.9%、経済政策学科 21.5%、社会福祉学科 18.1%である。

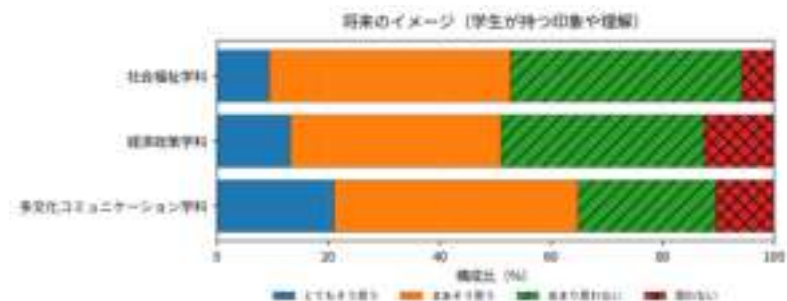


図 65 将来のイメージ(学生が持つ印象や理解) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 64.8%で最も高く、社会福祉学科が 52.6%、経済政策学科が 50.9%であった。最高値と最低値の差は 13.8 ポイントであり、学科間の差が確認できる。
より強い評価に当たる「とてもそう思う」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 21.0%、経済政策学科 13.1%、社会福祉学科 9.4%である。

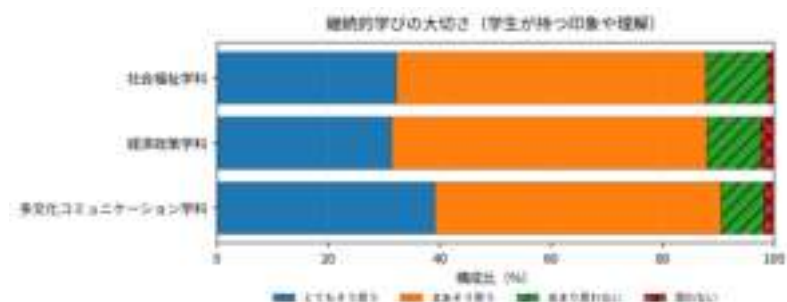


図 66 継続的学びの大切さ(学生が持つ印象や理解) [2025 年度]《学科別》

多文化コミュニケーション学科が 90.5%で最も高く、経済政策学科が 87.9%、社会福祉学科が 87.7%であった。最高値と最低値の差は 2.8 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「とてもそう思う」だけを見ると、多文化コミュニケーション学科 39.0%、社会福祉学科 32.2%、経済政策学科 31.3%である。

学生の生活と心理面

友人関係、家計、アルバイト、経済的不安、相談、将来・進路不安等を通じて、学生生活と心理面の支援課題を確認する。

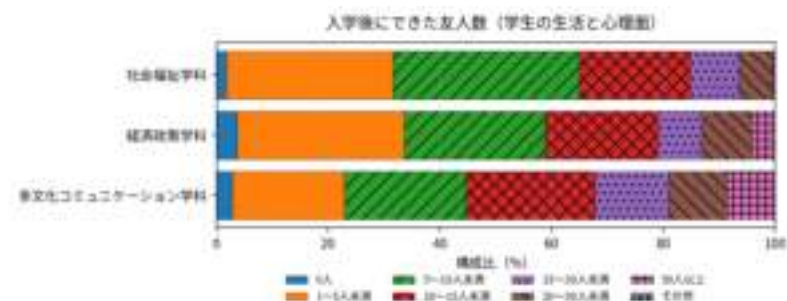


図 67 入学後にできた友人数(学生の生活と心理面) [2025 年度]《学科別》

入学後に 10 人以上の友人ができた割合は、多文化コミュニケーション学科が 55.2%で最も高く、経済政策学科が 40.7%、社会福祉学科が 35.1%であった。最高値と最低値の差は 20.2 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

友人関係は学生の所属感や大学生活への適応と関連し得るが、人数が多いことだけを望ましいと評価することはできない。孤立の可能性を把握する観点では「0 人」や「1～5 人未満」の層にも注目し、必要に応じて交流機会や相談導線を整えることが重要である。

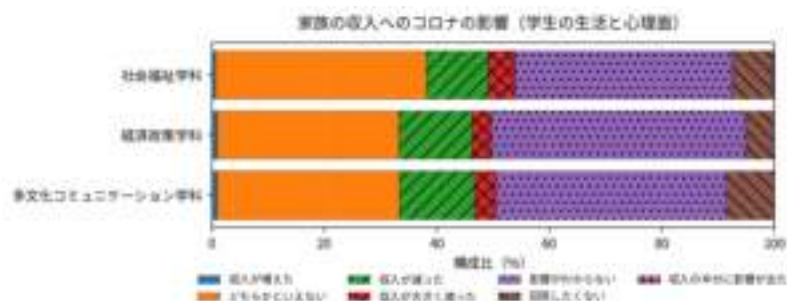


図 68 家族の収入へのコロナの影響(学生の生活と心理面) [2025 年度]《学科別》

家族収入に減少方向の影響があった割合は、多文化コミュニケーション学科が 17.1%で最も高く、社会福祉学科が 16.4%、経済政策学科が 16.4%であった。最高値と最低値の差は 0.8 ポイントであり、学科間の差が確認できる。

「影響がわからない」の割合も大きいので、この設問から家計状況を直接推定することはできない。経済的不安の設問と併せて、学修継続に影響する経済的困難を早期に把握できる相談・支援体制が必要である。

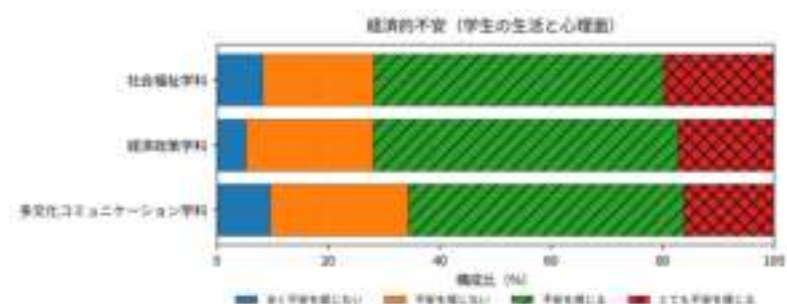


図 72 経済的不安 (学生の生活と心理面) [2025 年度]《学科別》

経済的不安を感じる割合は、経済政策学科が 72.0% で最も高く、社会福祉学科が 71.9%、多文化コミュニケーション学科が 65.7% であった。最高値と最低値の差は 6.2 ポイントであり、学科間の差が確認できる。いずれの学科でも経済的不安を感じる学生が一定割合存在する。学科差だけでなく、全学的な課題として捉え、経済支援情報の周知、相談窓口の利用しやすさ、アルバイト負担との両立支援を検討する必要がある。

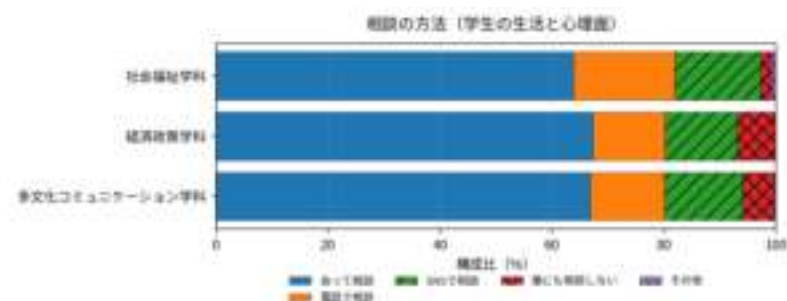


図 73 相談の方法 (学生の生活と心理面) [2025 年度]《学科別》

社会福祉・経済政策・多文化コミュニケーションの横計がそれぞれ 105、171、214 と記載されており、他の学科別集計で用いられている 171、214、105 と一致しない。したがって、この図は原資料記載値をそのまま掲載するが、学科間の厳密な比較・順位づけには用いず、原データ確認後に再集計することが望ましい。

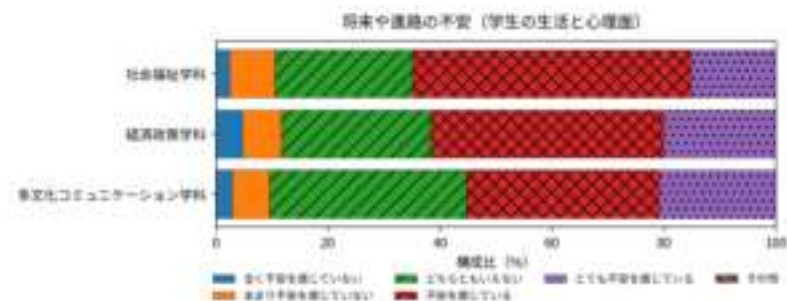


図 74 将来や進路の不安 (学生の生活と心理面) [2025 年度]《学科別》

将来や進路に不安を感じている割合は、社会福祉学科が 64.9% で最も高く、経済政策学科が 61.7%、多文化コミュニケーション学科が 55.2% であった。最高値と最低値の差は 9.7 ポイントであり、学科間の差が確認できる。将来・進路不安は、キャリア形成の段階や学年構成に大きく影響される。学科別支援では、専門分野と職業との接続を早期から可視化し、教職員への相談、キャリアセンター、インターンシップ等を段階的につなぐことが重要である。

学科別の総合的特徴と改善課題

(1) 社会福祉学科

社会福祉学科では、授業の意義説明、課題指示、グループワーク、専門分野の知識、コミュニケーション力などに比較的高い肯定評価がみられる項目がある。とくに対人援助や少人数・参加型学修と親和性の高い指標では強みが確認できる。一方、外国語力、グローバルな問題理解力、データサイエンス力などでは相対的に低い項目があり、専門教育の強みを維持しながら、データ活用・国際理解・汎用的能力をどのように補完するかが課題となる。改善にあたっては、福祉現場の事例データを用いたデータ分析、外国人利用者や多文化共生を扱う授業、ICTを活用した記録・支援計画作成等を専門科目と結びつけることで、専門教育から汎用的能力へ自然に接続する設計が有効と考えられる。

(2) 経済政策学科

経済政策学科では、文章を書く力、問題解決力、コンピュータを使う力、価値をつくりだす力などで相対的に高い評価がみられる項目がある。データ・政策・経営に関わる学修が、分析・表現・ICT利用等の自己評価につながっている可能性がある。一方、授業をつまらなく感じる経験、課題期限遅れ等の行動面では、他学科より高い割合となる項目もあり、学修意欲や課題管理の支援が重要である。

改善策として、データ分析や政策課題を学生自身の関心と結びつけたPBL、課題を小刻みに提出させる設計、途中段階でのフィードバック、キャリア目標との接続を強化することで、能力形成の強みを学修継続・授業参加の改善につなげることが望まれる。

(3) 多文化コミュニケーション学科

多文化コミュニケーション学科では、英語による授業、外国語力、異文化理解力、グローバルな問題理解力、自分とはちがう国の学生との交流など、国際・異文化関連項目で顕著な強みがみられる。また、文章を書く力、コミュニケーション力等でも高い肯定評価が確認できる項目がある。一方、専門分野の知識や仕事関連の知識・技術などでは、社会福祉学科等より低い項目があり、国際性・語学力を職業能力や専門性へ明確に接続することが課題となる。

改善にあたっては、語学・異文化理解を実務プロジェクト、地域連携、企業課題、観光・国際交流等と結びつけ、学生が「何ができるようになったか」を職業能力として説明できるようにすることが重要である。キャリア科目やインターンシップとの接続を強化することで、学科の特色を進路形成へ転換しやすくなる。

全学的な改善提案

① 学科の強みを全学で共有する

社会福祉学科の対人・参加型学修、経済政策学科の分析・ICT活用、多文化コミュニケーション学科の国際・異文化学修など、各学科の相対的な強みを授業改善事例として共有する。

② 授業外学修を設計する

予習・復習、自主学習が短時間層に集中する項目では、学修時間だけを求めるのではなく、授業内課題と授業外活動を一体化し、具体的な学修方法とフィードバックを提示する。

③ 国際性・データ活用・キャリアを横断的能力として位置づける

学科差が大きい外国語・異文化理解・データサイエンス・仕事関連能力について、特定学科だけの能力とせず、各専門分野の文脈に合わせた基礎教育を整備する。

④ 学生の不安を早期に把握する

経済的不安、将来・進路不安は全学的な課題である。1・2年次から相談機会を設け、ゼミ、学科教員、キャリア支援、学生相談、経済支援を切れ目なくつなぐ。

⑤ 差が大きい項目は学年・属性を重ねて再分析する

学科別の差は、学年構成、留学生比率、科目構成、実習の有無等の影響を受ける。今後は学科×学年等の二重クロスや統計的検定も用いて、差の背景を確認することが望ましい。

学科別総括

2025 年度の学科別集計からは、各学科の専門性を反映した強みが明確にみられる一方、授業外学修、キャリア形成、経済的不安、外国語・データ活用等については学科ごとに異なる課題が確認できた。重要なのは、学科間の順位づけそのものではなく、なぜ差が生じているのかをカリキュラム、授業方法、学年構成、学生属性、支援制度等の観点から検討し、改善につなげることである。

今後は、今回の学科別分析を学年別分析と組み合わせ、学科ごとの教育成果と学生生活の特徴をより精緻に把握する必要がある。また、経年比較を継続し、改善施策の実施後に指標がどのように変化したかを確認する PDCA 型の IR 活動につなげることが望まれる。

国籍別調査概要

本報告書は、2025 年度学生実態調査の国籍別クロス集計を対象として、授業の評価、学修経験、1 週間の時間配分、身についた力、大学での経験、学生が持つ印象・理解、生活・心理面の各領域について、国籍別の構成比をグラフ化し、項目ごとに特徴と差異を検討したものである。

国籍別回答者数は、日本人 457 名、留学生 33 名、計 490 名である。割合は原則として各国籍の横計を分母として算出した。4 件法では上位 2 選択肢の合計、役に立った程度では「とても役に立った」「少し役に立った」の合計、時間配分では主要時間帯・0 時間層・11 時間以上の層等を用いて比較した。

【原資料上の留意点】「意欲の湧く内容」の第三学科が「外国語学科」と表記されているが、横計 105 名で他の第三学科と一致するため、本報告書では多文化コミュニケーション学科として統一して表示し、表記差があったことを記録する。また、「相談の方法」の原資料は学科名と横計(105・171・214)の対応が他項目と一致しないため、当該図は原資料記載値を掲載するものの、国籍間順位の判断には用いない。

全体的にみた主要な国籍差

- **グループワーク:** 肯定的回答は、留学生が 93.9%で最も高く、日本人が 85.8%であった。最高値と最低値の差は 8.2 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。
- **英語による授業:** 肯定的回答は、留学生が 81.8%で最も高く、日本人が 28.2%であった。最高値と最低値の差は 53.6 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。
- **専門分野の知識:** 身についたとする割合は、留学生が 84.8%で最も高く、日本人が 82.5%であった。最高値と最低値の差は 2.4 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。
- **外国語力:** 身についたとする割合は、留学生が 90.9%で最も高く、日本人が 30.6%であった。最高値と最低値の差は 60.3 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。
- **異文化理解力:** 身についたとする割合は、留学生が 97.0%で最も高く、日本人が 78.3%であった。最高値と最低値の差は 18.6 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。
- **経済的不安:** 不安を感じる割合は、日本人が 34.4%で最も高く、留学生が 29.4%であった。最高値と最低値の差は 5.0 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

主要項目を見ると、学科の教育分野と整合する差が現れている項目がある一方、授業運営や学修支援のように全学的に改善可能な項目にも差がみられる。以下では、各グラフについて数値の違いを個別に確認し、差の大きさと教育上の含意を記述する。

授業の評価

授業設計、課題提示、学生参加、英語活用、学外活動等について、学生が授業内外でどの程度経験したかを国籍別に比較する。

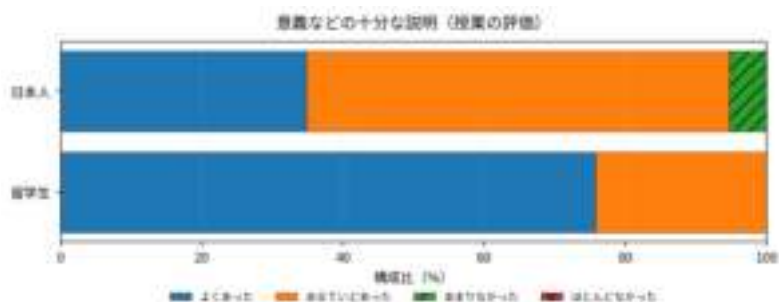


図1 意義などの十分な説明(授業の評価) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 100.0%で最も高く、日本人が 94.7%であった。最高値と最低値の差は 5.3 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、留学生 75.8%、日本人 34.8%である。

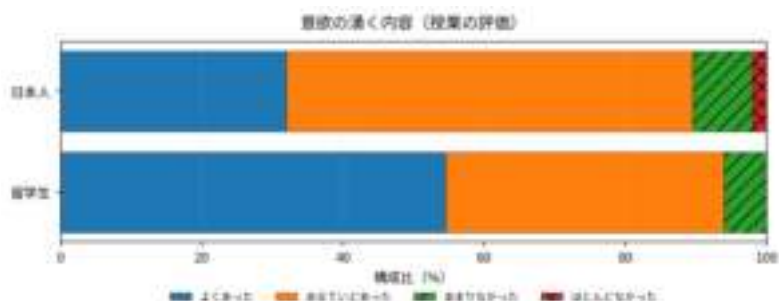


図2 意欲の湧く内容(授業の評価) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 93.9%で最も高く、日本人が 89.5%であった。最高値と最低値の差は 4.4 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、留学生 54.5%、日本人 31.9%である。

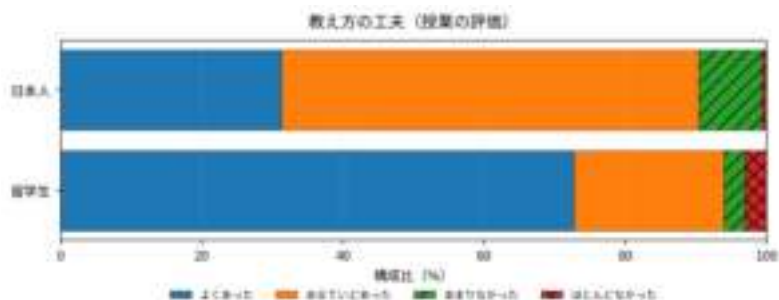


図3 教え方の工夫(授業の評価) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 93.9%で最も高く、日本人が 90.4%であった。最高値と最低値の差は 3.6 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、留学生 72.7%、日本人 31.3%である。

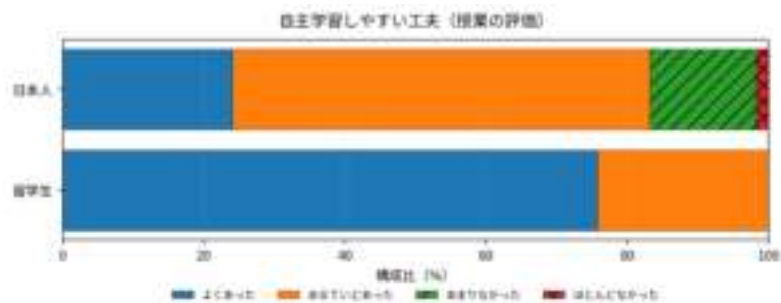


図4 自主学習しやすい工夫(授業の評価) [2025年度]《国籍別》

留学生が 100.0%で最も高く、日本人が 83.2%であった。最高値と最低値の差は 16.8 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、留学生 75.8%、日本人 24.1%である。

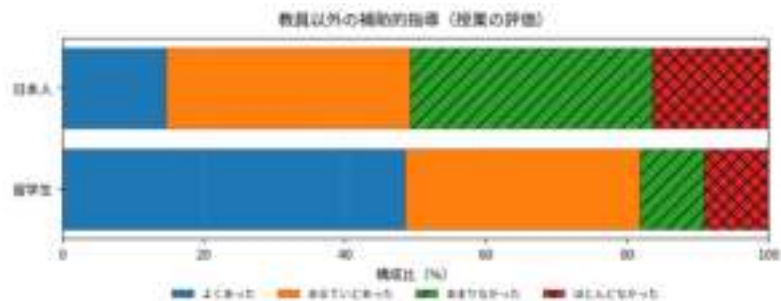


図5 教員以外の補助的指導(授業の評価) [2025年度]《国籍別》

留学生が 81.8%で最も高く、日本人が 49.2%であった。最高値と最低値の差は 32.6 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、留学生 48.5%、日本人 14.7%である。

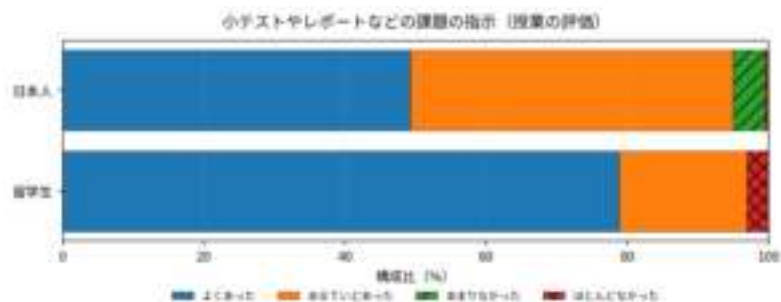


図6 小テストやレポートなどの課題の指示(授業の評価) [2025年度]《国籍別》

留学生が 97.0%で最も高く、日本人が 95.0%であった。最高値と最低値の差は 2.0 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、留学生 78.8%、日本人 49.2%である。

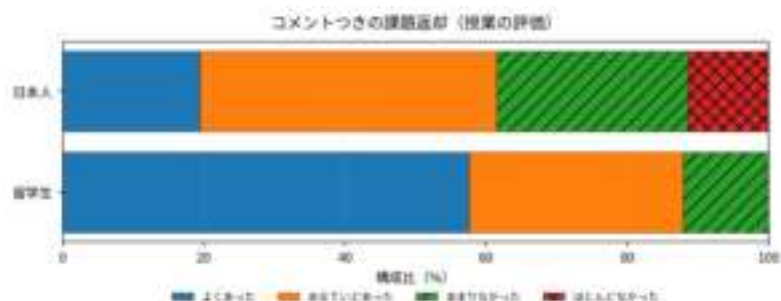


図7 コメント付きの課題返却(授業の評価) [2025年度]《国籍別》

留学生が 87.9%で最も高く、日本人が 61.5%であった。最高値と最低値の差は 26.4 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、留学生 57.6%、日本人 19.5%である。

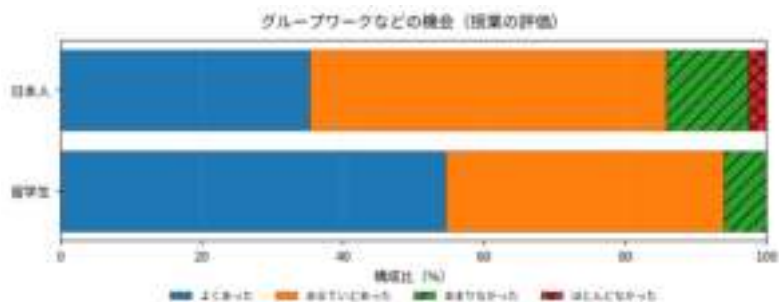


図8 グループワークなどの機会(授業の評価) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 93.9%で最も高く、日本人が 85.8%であった。最高値と最低値の差は 8.2 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、留学生 54.5%、日本人 35.2%である。

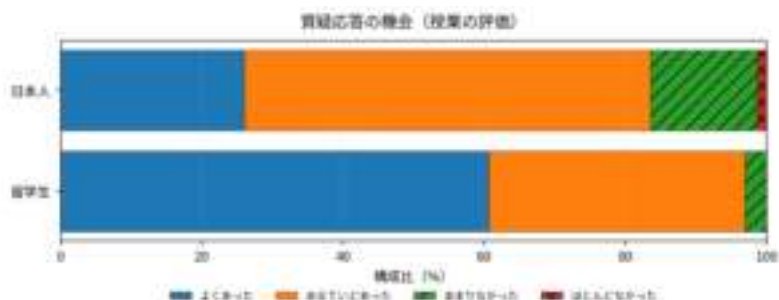


図9 質疑応答の機会(授業の評価) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 97.0%で最も高く、日本人が 83.6%であった。最高値と最低値の差は 13.4 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、留学生 60.6%、日本人 26.0%である。

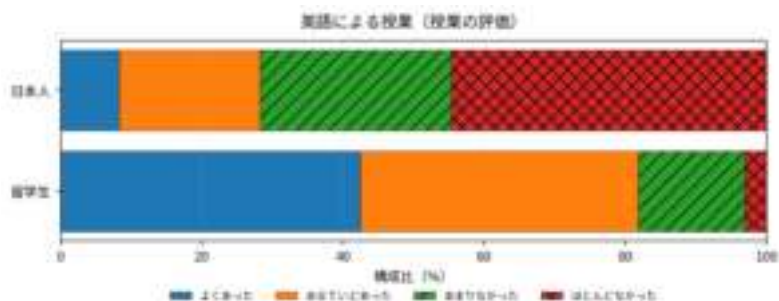


図10 英語による授業(授業の評価) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 81.8%で最も高く、日本人が 28.2%であった。最高値と最低値の差は 53.6 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、留学生 42.4%、日本人 8.3%である。

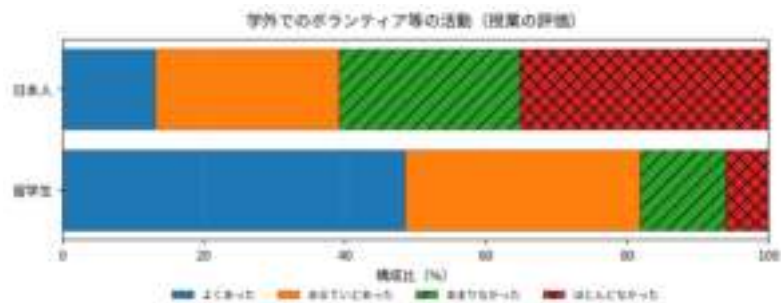


図11 学外でのボランティア等の活動(授業の評価) [2025年度]《国籍別》

留学生が81.8%で最も高く、日本人が39.2%であった。最高値と最低値の差は42.6ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「よくあった」だけを見ると、留学生48.5%、日本人13.1%である。

役に立った程度

大学で経験した学修・相談・国際交流等が学生にとってどの程度役に立ったか、同時に経験機会がどこまで広がっているかを検討する。

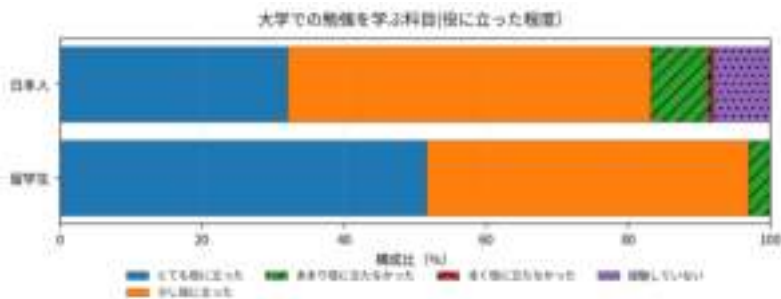


図12 大学での勉強を学ぶ科目(役に立った程度) [2025年度]《国籍別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、留学生が97.0%で最も高く、日本人が83.2%であった。最高値と最低値の差は13.8ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、留学生100.0%、日本人91.9%である。

。

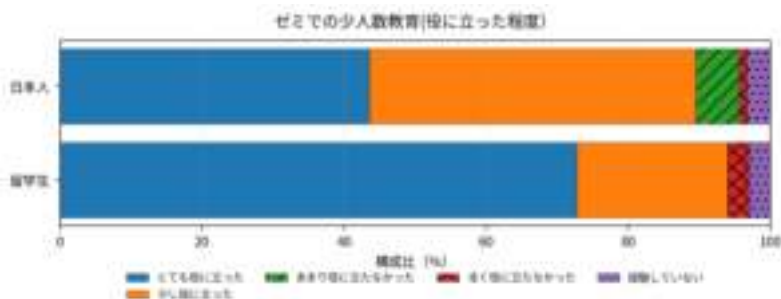


図13 ゼミでの少人数教育(役に立った程度) [2025年度]《国籍別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、留学生が93.9%で最も高く、日本人が89.5%であった。最高値と最低値の差は4.4ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、留学生97.0%、日本人96.7%である。

。

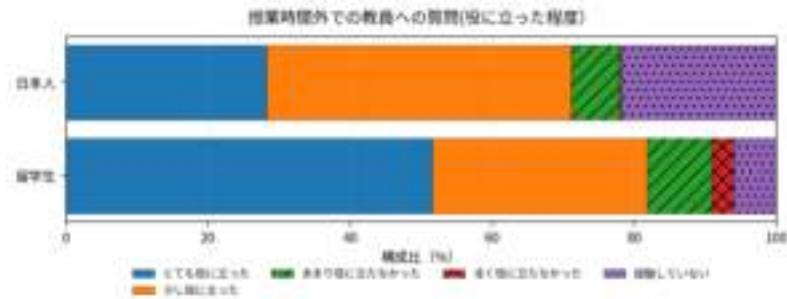


図 14 授業時間外での教員への質問(役に立った程度) [2025 年度]《国籍別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、留学生が 81.8%で最も高く、日本人が 71.1%であった。最高値と最低値の差は 10.7 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、留学生 93.9%、日本人 78.1%である。

。

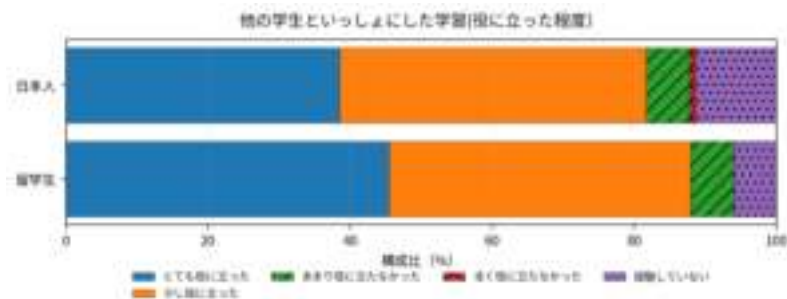


図 15 他の学生といっしょにした学習(役に立った程度) [2025 年度]《国籍別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、留学生が 87.9%で最も高く、日本人が 81.6%であった。最高値と最低値の差は 6.3 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、留学生 93.9%、日本人 88.6%である。

。

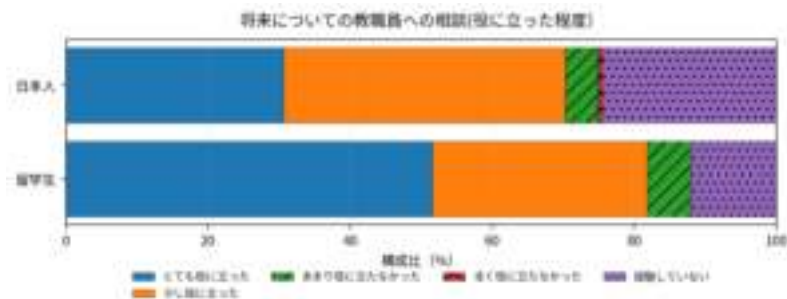


図 16 将来についての教職員への相談(役に立った程度) [2025 年度]《国籍別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、留学生が 81.8%で最も高く、日本人が 70.2%であった。最高値と最低値の差は 11.6 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、留学生 87.9%、日本人 75.5%である。

。

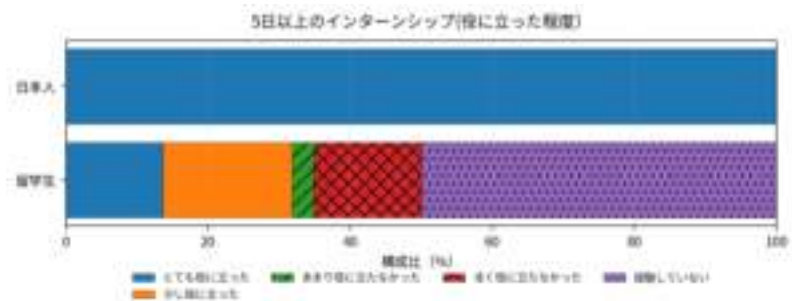


図 17 5 日以上のインターンシップ(役に立った程度) [2025 年度]《国籍別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、日本人が 933.3%で最も高く、留學生が 31.8%であった。最高値と最低値の差は 901.5 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、留學生 50.0%、日本人-4977.8%である。。インターンシップは「経験していない」の割合が大きくなりやすい項目であり、経験者の評価だけでなく、参加機会の不足や学年構成の影響を考慮する必要がある。キャリア教育との接続、参加時期、情報提供の方法を国籍ごとに点検することが有効である。

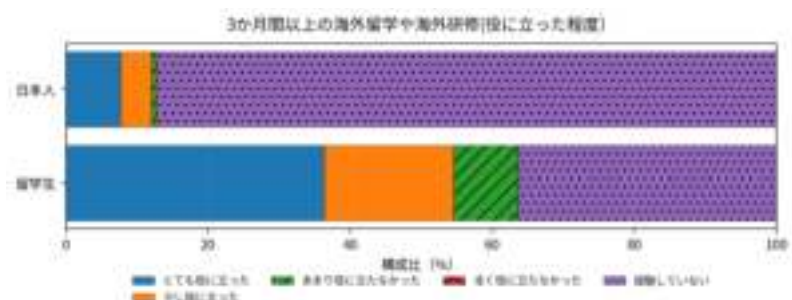


図 18 3か月間以上の海外留学や海外研修(役に立った程度) [2025 年度]《国籍別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、留學生が 54.5%で最も高く、日本人が 12.0%であった。最高値と最低値の差は 42.5 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、留學生 63.6%、日本人 12.7%である。

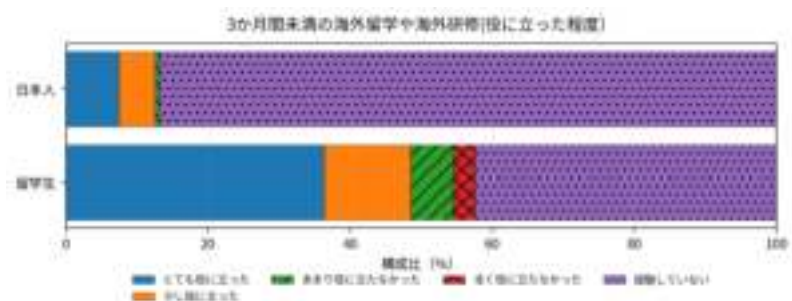


図 19 3か月間未満の海外留学や海外研修(役に立った程度) [2025 年度]《国籍別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、留學生が 48.5%で最も高く、日本人が 12.5%であった。最高値と最低値の差は 36.0 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、留學生 57.6%、日本人 13.1%である。

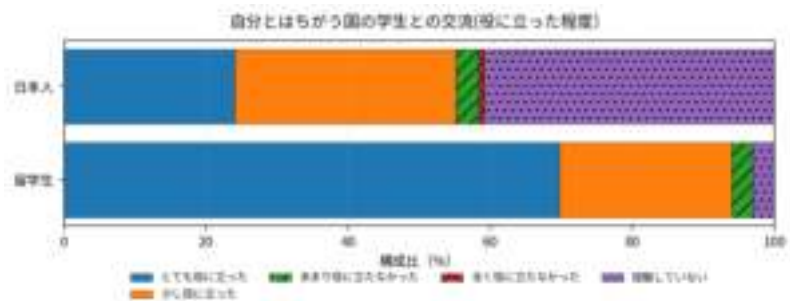


図 20 自分とはちがう国の学生との交流(役に立った程度) [2025 年度]《国籍別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、留学生が 93.9%で最も高く、日本人が 55.1%であった。最高値と最低値の差は 38.8 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、留学生 97.0%、日本人 59.1%である。

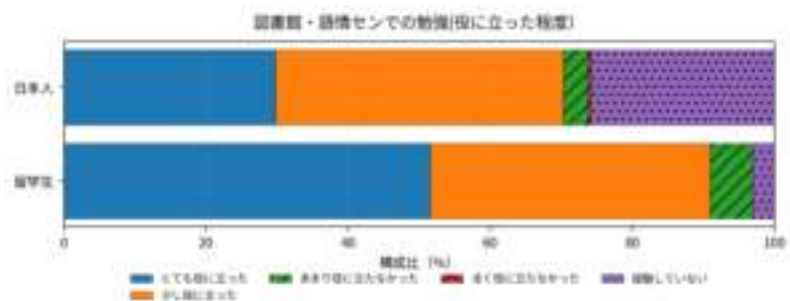


図 21 図書館・語情センでの勉強(役に立った程度) [2025 年度]《国籍別》

「とても役に立った」「少し役に立った」の合計は、留学生が 90.9%で最も高く、日本人が 70.2%であった。最高値と最低値の差は 20.7 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

一方、当該経験そのものを持つ割合(「経験していない」を除く)は、留学生 97.0%、日本人 74.2%である。

週間の過ごす時間

授業、授業外学修、課外活動、アルバイト、就職活動、交友、スマートフォン利用の時間配分から、学修と生活の構造を国籍別に確認する。

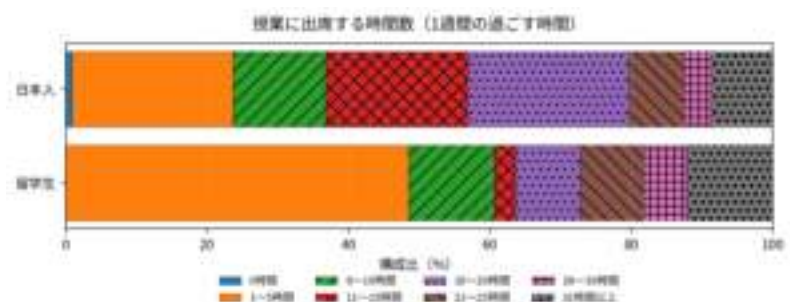


図 22 授業に出席する時間数(1週間の過ごす時間) [2025 年度]《国籍別》

最も多い時間帯は、日本人「1～5 時間」22.8%、留学生「1～5 時間」48.5%である。時間配分が中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、日本人 0.9%、留学生 0.0%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。

11 時間以上の割合を合計すると、日本人 63.2%、留学生 39.4%である。長時間層が多い国籍では、その活動が学修成果を高めるものか、あるいは学修時間を圧迫するものかを項目の性質に応じて評価する必要がある。

い。

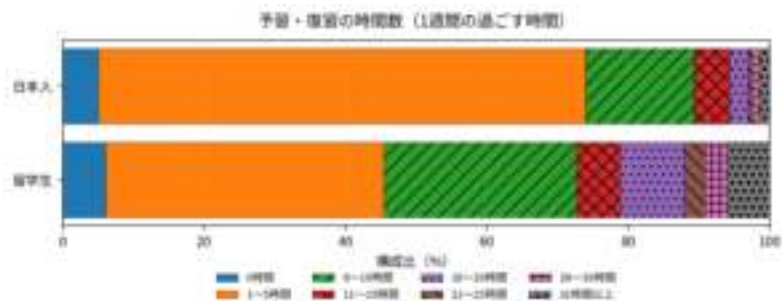


図 23 予習・復習の時間数(1週間の過ごす時間) [2025 年度]《国籍別》

最も多い時間帯は、日本人「1～5 時間」68.9%、留学生「1～5 時間」39.4%である。時間配分が中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、留学生 6.1%、日本人 5.0%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。

11 時間以上の割合を合計すると、留学生 27.3%、日本人 10.7%である。長時間層が多い国籍では、その活動が学修成果を高めるものか、あるいは学修時間を圧迫するものかを項目の性質に応じて評価する必要がある。

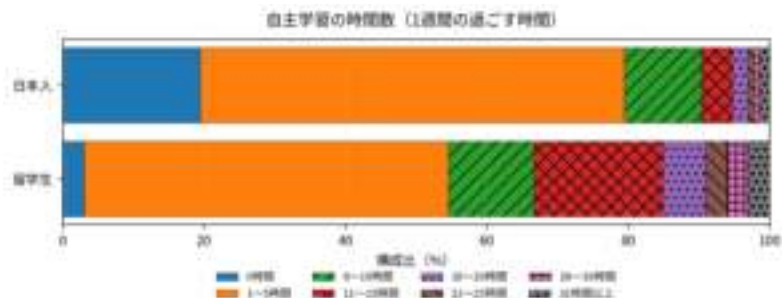


図 24 自主学習の時間数(1週間の過ごす時間) [2025 年度]《国籍別》

最も多い時間帯は、日本人「1～5 時間」60.0%、留学生「1～5 時間」51.5%である。時間配分が中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、日本人 19.5%、留学生 3.0%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。

11 時間以上の割合を合計すると、留学生 33.3%、日本人 9.6%である。長時間層が多い国籍では、その活動が学修成果を高めるものか、あるいは学修時間を圧迫するものかを項目の性質に応じて評価する必要がある。

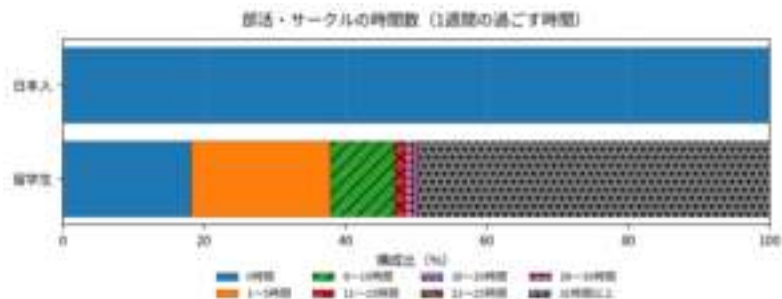


図 25 部活・サークルの時間数(1週間の過ごす時間) [2025 年度]《国籍別》

最も多い時間帯は、日本人「31 時間以上」3808.3%、留学生「31 時間以上」50.0%である。時間配分が中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、日本人 2058.3%、留学生 18.2%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。

11 時間以上の割合を合計すると、日本人 4100.0%、留学生 53.0%である。長時間層が多い国籍では、その活動が学修成果を高めるものか、あるいは学修時間を圧迫するものかを項目の性質に応じて評価する必要がある。

い。

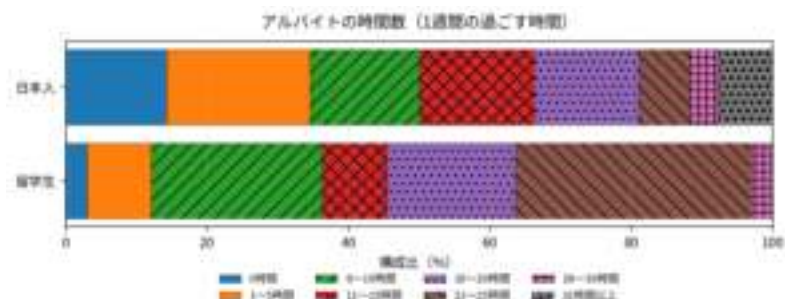


図 26 アルバイトの時間数(1週間の過ごす時間) [2025 年度] 《国籍別》

最も多い時間帯は、日本人「1～5 時間」20.4%、留学生「21～25 時間」33.3%である。時間配分の中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、日本人 14.2%、留学生 3.0%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。

11 時間以上の割合を合計すると、留学生 63.6%、日本人 49.9%である。長時間層が多い国籍では、その活動が学修成果を高めるものか、あるいは学修時間を圧迫するものかを項目の性質に応じて評価する必要がある。

アルバイト時間が長い学生では、授業外学修や休養との競合が生じる可能性がある。経済的事情も関連し得るため、国籍別の時間差は生活支援・履修支援とあわせて検討する必要がある。

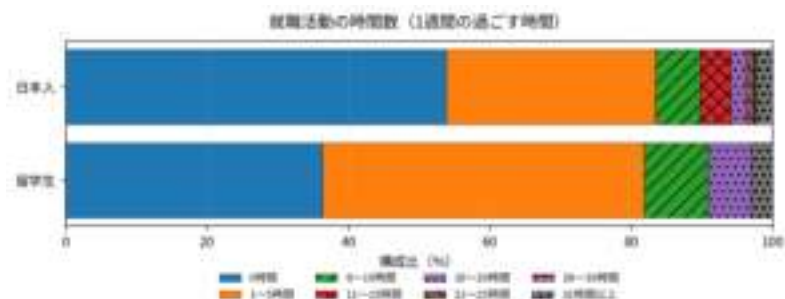


図 27 就職活動の時間数(1週間の過ごす時間) [2025 年度] 《国籍別》

最も多い時間帯は、日本人「0 時間」53.8%、留学生「1～5 時間」45.5%である。時間配分の中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、日本人 53.8%、留学生 36.4%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。

11 時間以上の割合を合計すると、日本人 10.3%、留学生 9.1%である。長時間層が多い国籍では、その活動が学修成果を高めるものか、あるいは学修時間を圧迫するものかを項目の性質に応じて評価する必要がある。

就職活動時間は学年構成の影響を強く受けるため、国籍差を直接的な支援成果の差とみなすことは適切ではない。学年別データも併用し、キャリア支援への接続時期や活動量の違いを確認することが必要である。

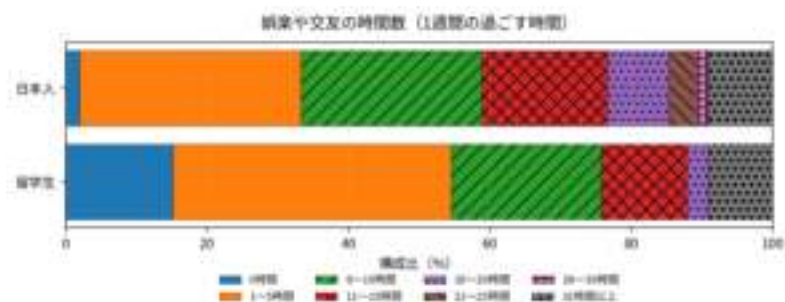


図 28 娯楽や交友の時間数(1週間の過ごす時間) [2025 年度] 《国籍別》

最も多い時間帯は、日本人「1～5 時間」31.3%、留学生「1～5 時間」39.4%である。時間配分の中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、留学生 15.2%、日本人 2.0%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。

11 時間以上の割合を合計すると、日本人 41.1%、留学生 24.2%である。長時間層が多い国籍では、その活動が学修成果を高めるものか、あるいは学修時間を圧迫するものかを項目の性質に応じて評価する必要がある。

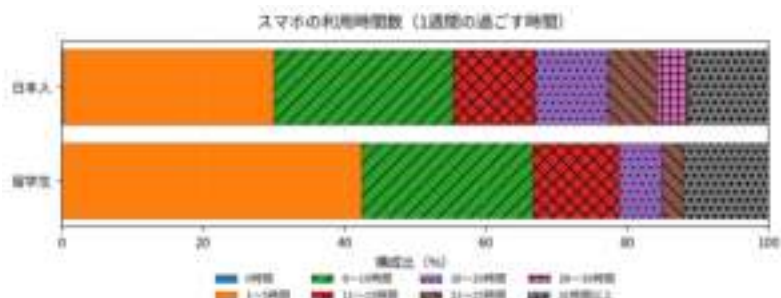


図 29 スマホの利用時間数(1 週間の過ごす時間) [2025 年度]《国籍別》

最も多い時間帯は、日本人「1～5 時間」29.8%、留学生「1～5 時間」42.4%である。時間配分の中心が学科によって異なるかどうかを把握できる。

「0 時間」の割合は、日本人 0.2%、留学生 0.0%である。0 時間層の差は、当該活動への参加の有無や学修・生活上の優先順位の違いを示す。

11 時間以上の割合を合計すると、日本人 44.6%、留学生 33.3%である。長時間層が多い国籍では、その活動が学修成果を高めるものか、あるいは学修時間を圧迫するものかを項目の性質に応じて評価する必要がある。

力の身について程度

専門知識、汎用的能力、外国語、データサイエンス、問題解決、異文化理解、コミュニケーション等の自己評価を国籍別に比較する。

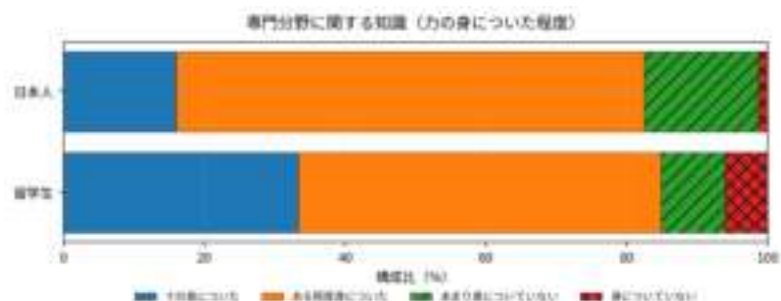


図 30 専門分野に関する知識(力の身について程度) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 84.8%で最も高く、日本人が 82.5%であった。最高値と最低値の差は 2.4 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、留学生 33.3%、日本人 16.0%である。

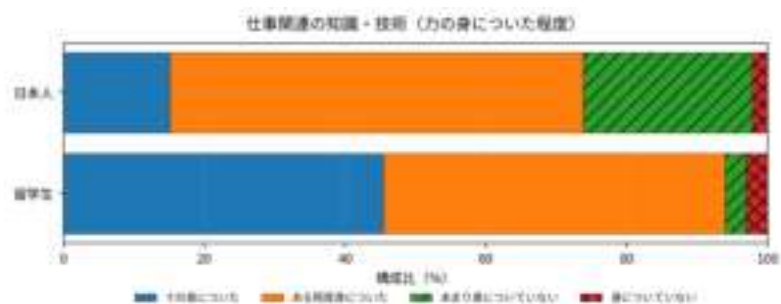


図 31 仕事関連の知識・技術(力の身についた程度) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 93.9%で最も高く、日本人が 73.7%であった。最高値と最低値の差は 20.2 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、留学生 45.5%、日本人 15.1%である。

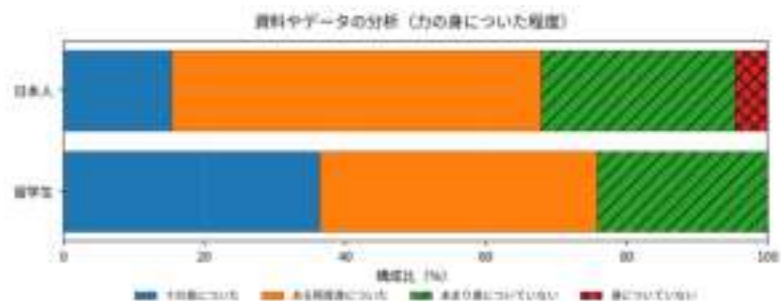


図 32 資料やデータの分析(力の身についた程度) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 75.8%で最も高く、日本人が 67.8%であった。最高値と最低値の差は 7.9 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、留学生 36.4%、日本人 15.3%である。

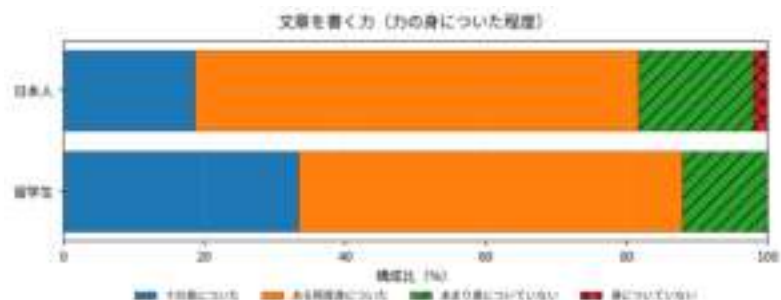


図 33 文章を書く力(力の身についた程度) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 87.9%で最も高く、日本人が 81.6%であった。最高値と最低値の差は 6.3 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、留学生 33.3%、日本人 18.6%である。

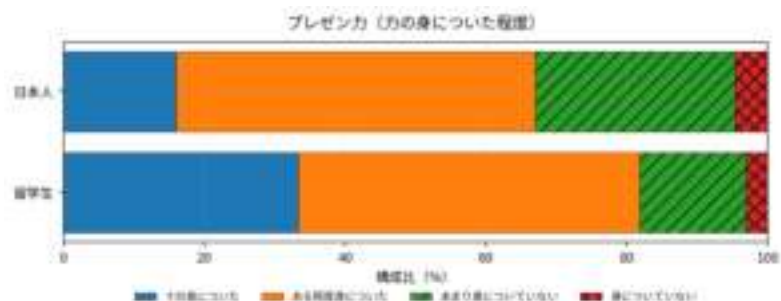


図 34 プレゼン力(力の身についた程度) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 81.8%で最も高く、日本人が 67.0%であった。最高値と最低値の差は 14.9 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、留学生 33.3%、日本人 16.0%である。

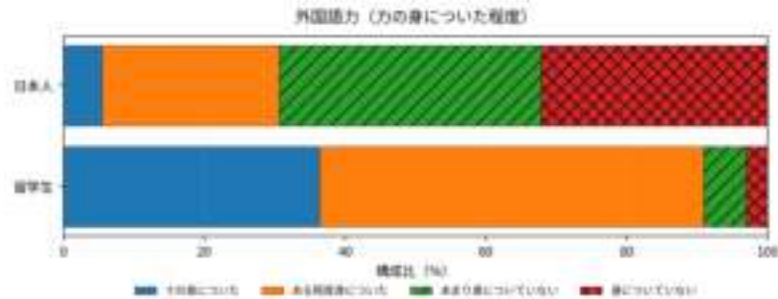


図 35 外国語力(力の身についた程度) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 90.9%で最も高く、日本人が 30.6%であった。最高値と最低値の差は 60.3 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、留学生 36.4%、日本人 5.5%である。

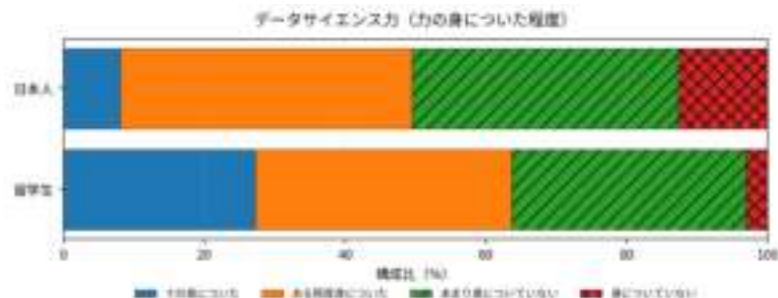


図 36 データサイエンス力(力の身についた程度) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 63.6%で最も高く、日本人が 49.5%であった。最高値と最低値の差は 14.2 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、留学生 27.3%、日本人 8.1%である。

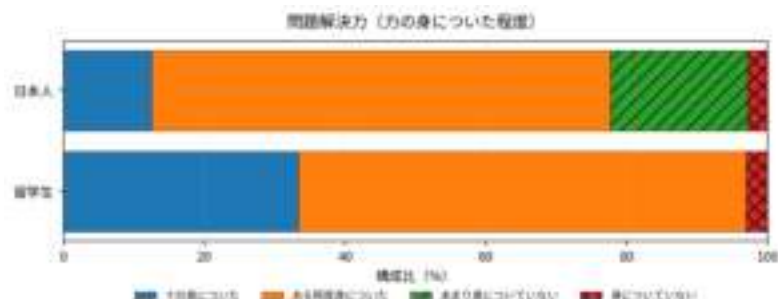


図 37 問題解決力(力の身についた程度) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 97.0%で最も高く、日本人が 77.7%であった。最高値と最低値の差は 19.3 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、留学生 33.3%、日本人 12.5%である。

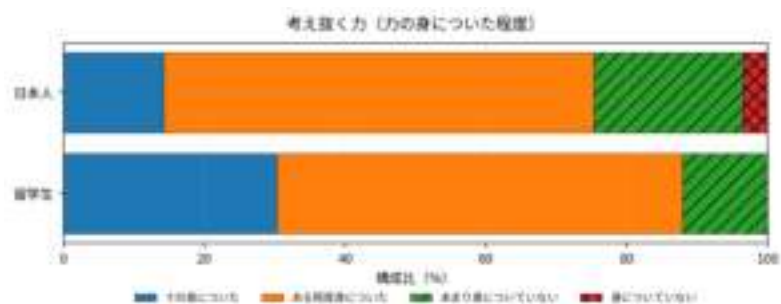


図 38 考え抜く力(力の身についた程度) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 87.9%で最も高く、日本人が 75.3%であった。最高値と最低値の差は 12.6 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、留学生 30.3%、日本人 14.2%である。

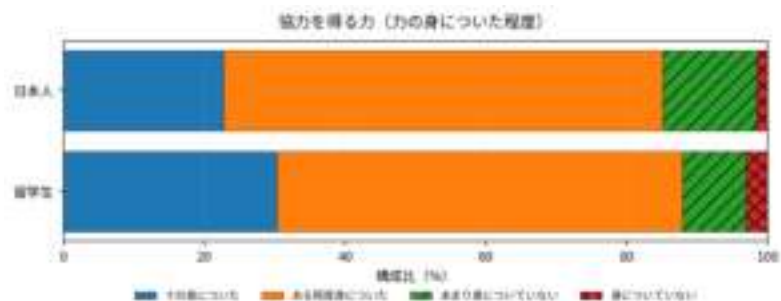


図 39 協力を得る力(力の身についた程度) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 87.9%で最も高く、日本人が 85.1%であった。最高値と最低値の差は 2.8 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、留学生 30.3%、日本人 22.8%である。

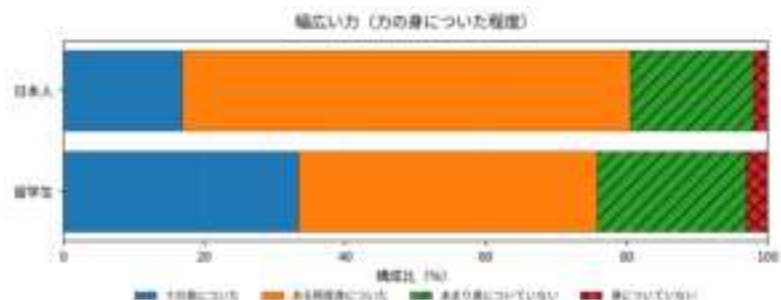


図 40 幅広い力(力の身についた程度) [2025 年度]《国籍別》

日本人が 80.5%で最も高く、留学生が 75.8%であった。最高値と最低値の差は 4.8 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、留学生 33.3%、日本人 16.8%である。

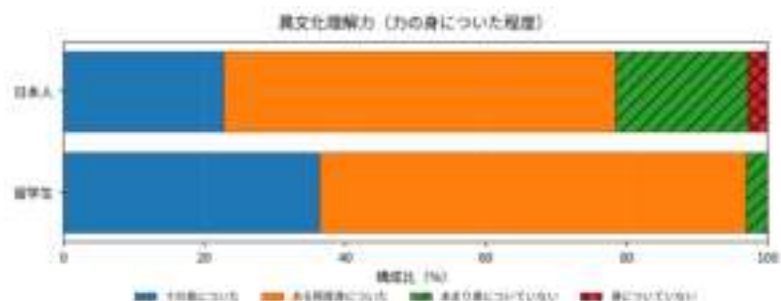


図 41 異文化理解力(力の身についた程度) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 97.0%で最も高く、日本人が 78.3%であった。最高値と最低値の差は 18.6 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身について」だけを見ると、留学生 36.4%、日本人 22.8%である。

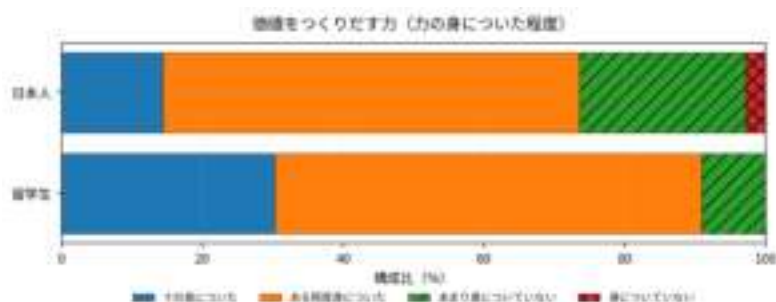


図 42 価値をつくりだす力(力の身について) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 90.9%で最も高く、日本人が 73.5%であった。最高値と最低値の差は 17.4 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身について」だけを見ると、留学生 30.3%、日本人 14.4%である。

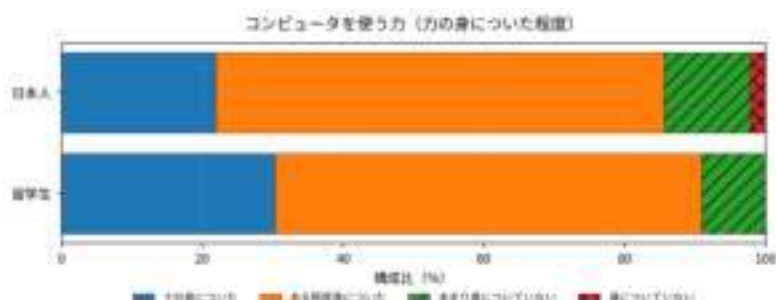


図 43 コンピュータを使う力(力の身について) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 90.9%で最も高く、日本人が 85.6%であった。最高値と最低値の差は 5.4 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身について」だけを見ると、留学生 30.3%、日本人 21.9%である。

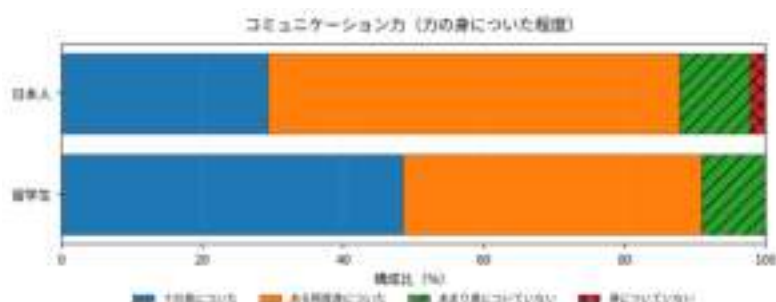


図 44 コミュニケーション力(力の身について) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 90.9%で最も高く、日本人が 87.7%であった。最高値と最低値の差は 3.2 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身について」だけを見ると、留学生 48.5%、日本人 29.3%である。

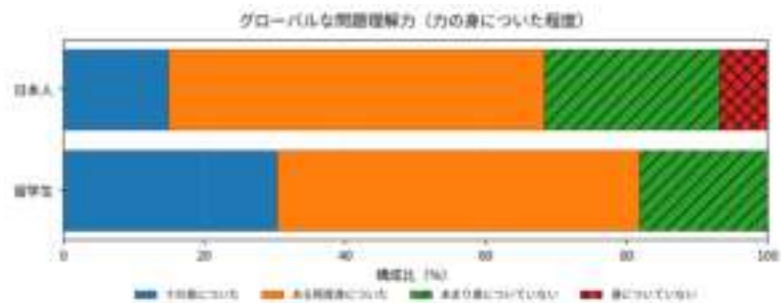


図 45 グローバルな問題理解力(力の身について程度) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 81.8%で最も高く、日本人が 68.3%であった。最高値と最低値の差は 13.5 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身について」だけを見ると、留学生 30.3%、日本人 14.9%である。

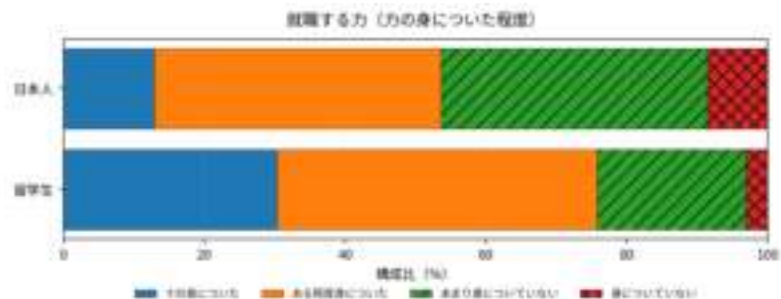


図 46 就職する力(力の身について程度) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 75.8%で最も高く、日本人が 53.6%であった。最高値と最低値の差は 22.1 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身について」だけを見ると、留学生 30.3%、日本人 12.9%である。

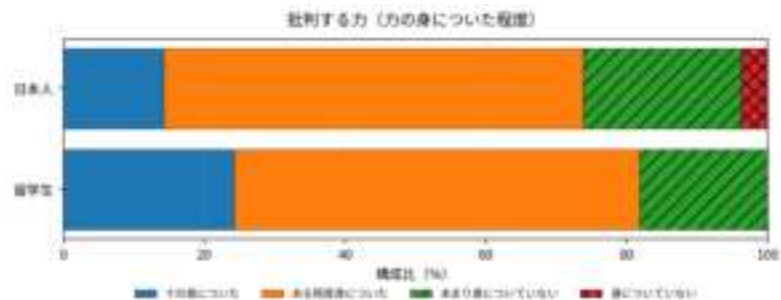


図 47 批判する力(力の身について程度) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 81.8%で最も高く、日本人が 73.7%であった。最高値と最低値の差は 8.1 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身について」だけを見ると、留学生 24.2%、日本人 14.2%である。

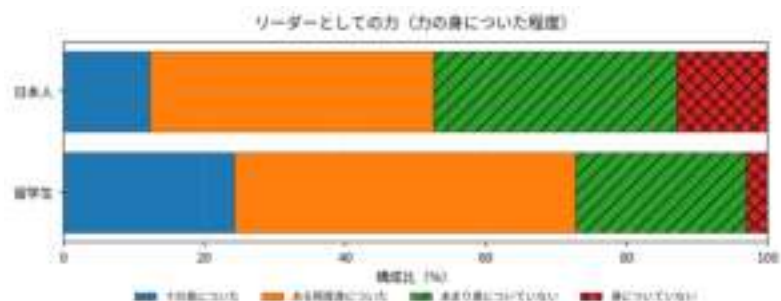


図 48 リーダーとしての力(力の身について程度) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 72.7%で最も高く、日本人が 52.5%であった。最高値と最低値の差は 20.2 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「十分身についた」だけを見ると、留学生 24.2%、日本人 12.3%である。

大学での経験

オンライン利用、教員との関係、学修行動、出席・課題行動、将来相談等の実際の経験頻度を国籍別に確認する。

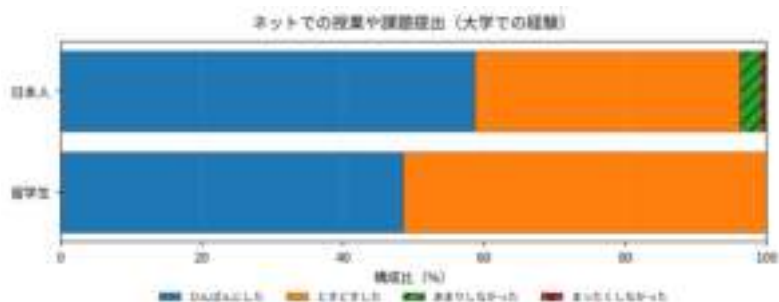


図 49 ネットでの授業や課題提出(大学での経験) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 100.0%で最も高く、日本人が 96.3%であった。最高値と最低値の差は 3.7 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、日本人 58.6%、留学生 48.5%である。

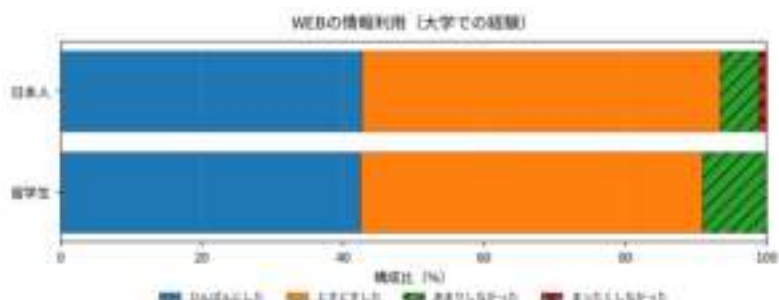


図 50 WEB の情報利用(大学での経験) [2025 年度]《国籍別》

日本人が 93.4%で最も高く、留学生が 90.9%であった。最高値と最低値の差は 2.5 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、日本人 42.7%、留学生 42.4%である。

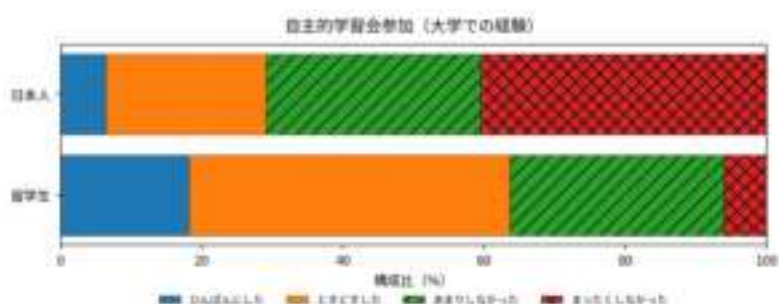


図 51 自主的学習会参加(大学での経験) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 63.6%で最も高く、日本人が 29.1%であった。最高値と最低値の差は 34.5 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、留学生 18.2%、日本人 6.3%である。

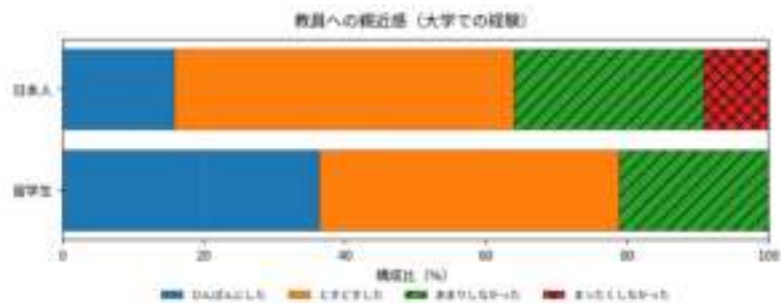


図 52 教員への親近感(大学での経験) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 78.8%で最も高く、日本人が 63.9%であった。最高値と最低値の差は 14.9 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、留学生 36.4%、日本人 15.8%である。

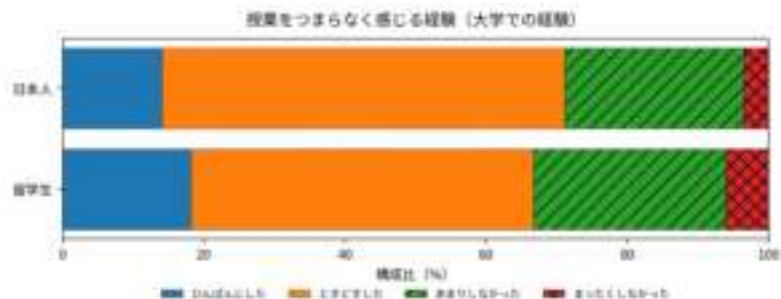


図 53 授業をつまらなく感じる経験(大学での経験) [2025 年度]《国籍別》

日本人が 71.1%で最も高く、留学生が 66.7%であった。最高値と最低値の差は 4.4 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、留学生 18.2%、日本人 14.0%である。

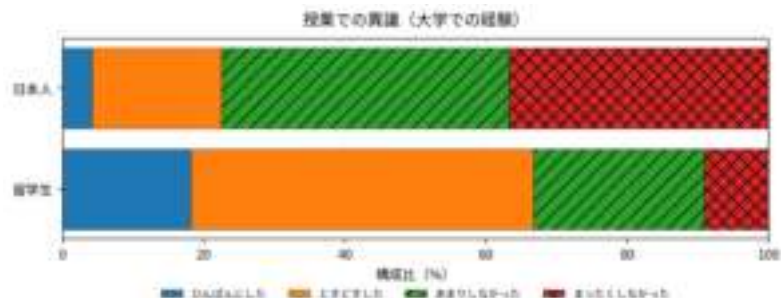


図 54 授業での異議(大学での経験) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 66.7%で最も高く、日本人が 22.5%であった。最高値と最低値の差は 44.1 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、留学生 18.2%、日本人 4.2%である。

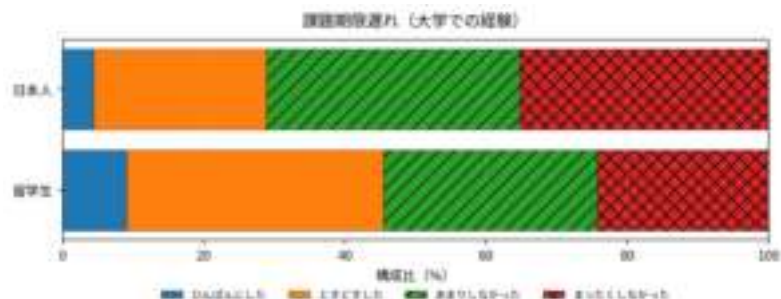


図 55 課題期限遅れ(大学での経験) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 45.5%で最も高く、日本人が 28.9%であった。最高値と最低値の差は 16.6 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、留学生 9.1%、日本人 4.4%である。

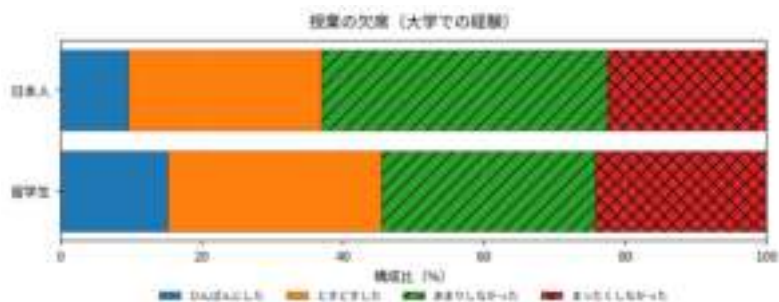


図 56 授業の欠席(大学での経験) [2025 年度] <国籍別>

留学生が 45.5%で最も高く、日本人が 37.0%であった。最高値と最低値の差は 8.5 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、留学生 15.2%、日本人 9.6%である。

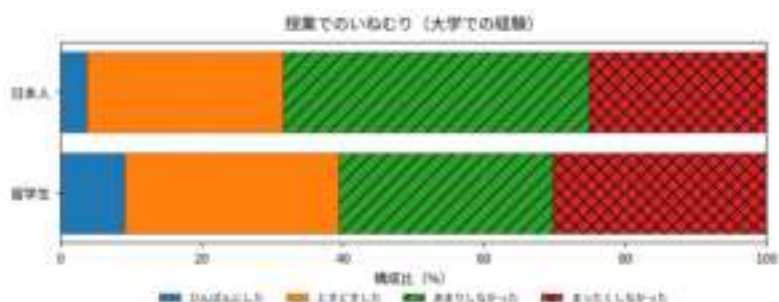


図 57 授業でのいねむり(大学での経験) [2025 年度] <国籍別>

留学生が 39.4%で最も高く、日本人が 31.5%であった。最高値と最低値の差は 7.9 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、留学生 9.1%、日本人 3.7%である。

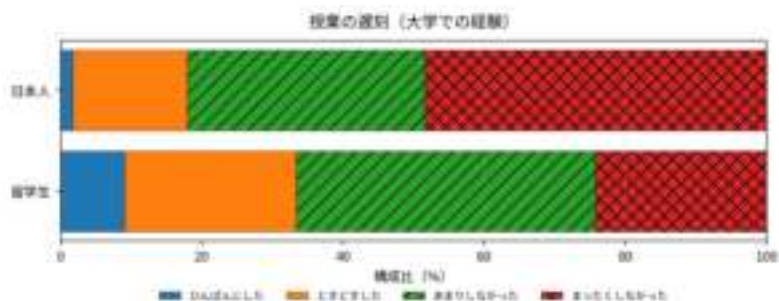


図 58 授業の遅刻(大学での経験) [2025 年度] <国籍別>

留学生が 33.3%で最も高く、日本人が 17.9%であった。最高値と最低値の差は 15.4 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、留学生 9.1%、日本人 1.8%である。

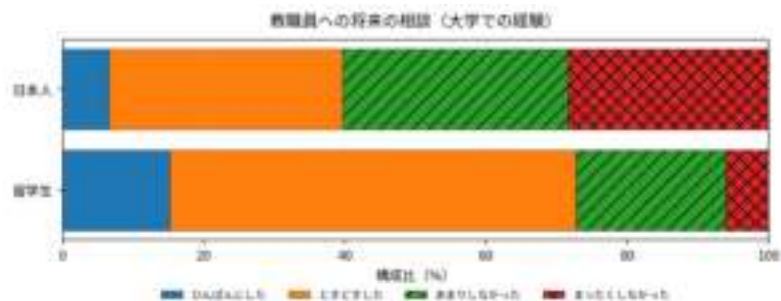


図 59 教職員への将来の相談(大学での経験) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 72.7%で最も高く、日本人が 39.6%であった。最高値と最低値の差は 33.1 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「ひんぱんにした」だけを見ると、留学生 15.2%、日本人 6.6%である。

学生が持つ印象や理解

主体的学修、大学が求める力、大学の熱意、成長実感、将来イメージ、継続学修等について学生の認識を比較する。

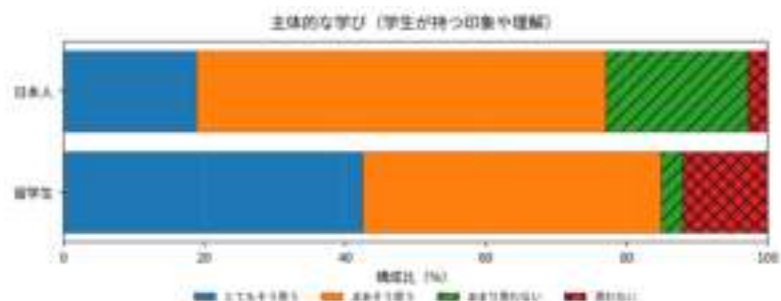


図 60 主体的な学び(学生が持つ印象や理解) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 84.8%で最も高く、日本人が 77.0%であった。最高値と最低値の差は 7.8 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「とてもそう思う」だけを見ると、留学生 42.4%、日本人 18.8%である。

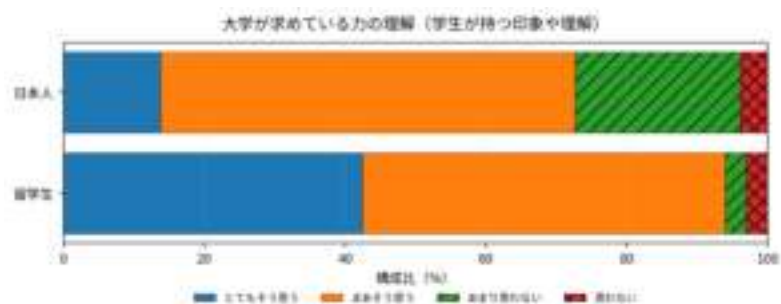


図 61 大学が求めている力の理解(学生が持つ印象や理解) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 93.9%で最も高く、日本人が 72.6%であった。最高値と最低値の差は 21.3 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「とてもそう思う」だけを見ると、留学生 42.4%、日本人 13.8%である。

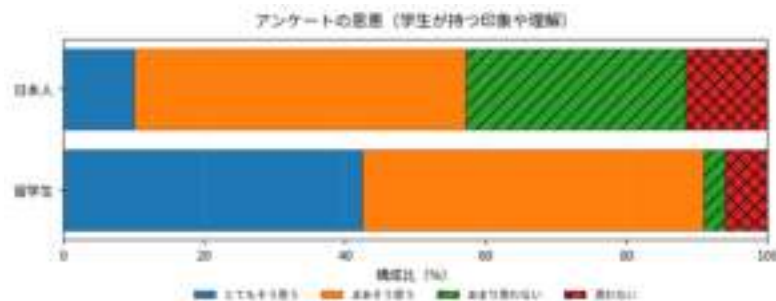


図 62 アンケートの恩恵(学生が持つ印象や理解) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 90.9%で最も高く、日本人が 57.1%であった。最高値と最低値の差は 33.8 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「とてもそう思う」だけを見ると、留学生 42.4%、日本人 10.1%である。

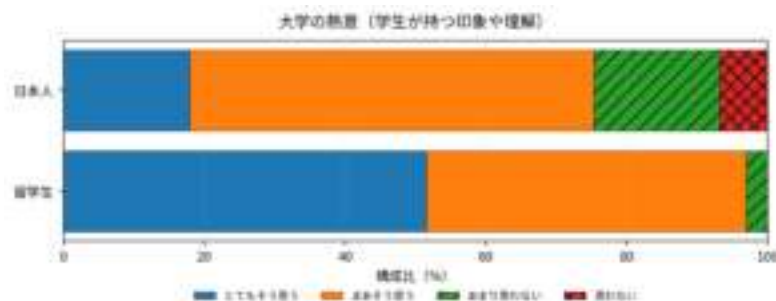


図 63 大学の熱意(学生が持つ印象や理解) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 97.0%で最も高く、日本人が 75.3%であった。最高値と最低値の差は 21.7 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「とてもそう思う」だけを見ると、留学生 51.5%、日本人 17.9%である。

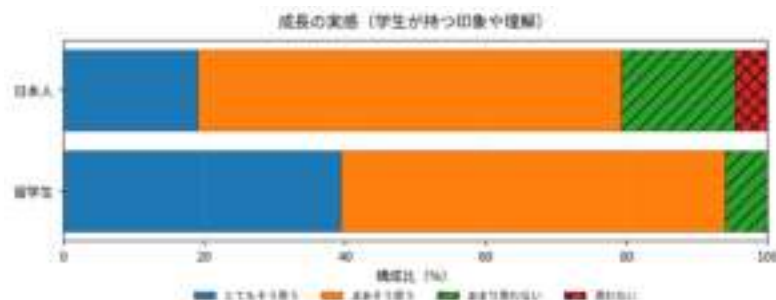


図 64 成長の実感(学生が持つ印象や理解) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 93.9%で最も高く、日本人が 79.2%であった。最高値と最低値の差は 14.7 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「とてもそう思う」だけを見ると、留学生 39.4%、日本人 19.0%である。

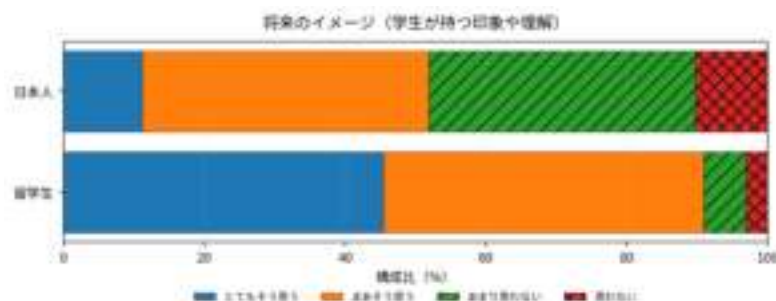


図 65 将来のイメージ(学生が持つ印象や理解) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 90.9%で最も高く、日本人が 51.9%であった。最高値と最低値の差は 39.0 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「とてもそう思う」だけを見ると、留学生 45.5%、日本人 11.2%である。

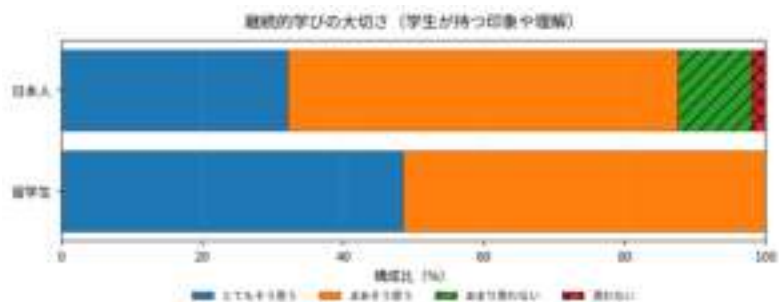


図 66 継続的学びの大切さ(学生が持つ印象や理解) [2025 年度]《国籍別》

留学生が 100.0%で最も高く、日本人が 87.5%であった。最高値と最低値の差は 12.5 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

より強い評価に当たる「とてもそう思う」だけを見ると、留学生 48.5%、日本人 32.2%である。

学生の生活と心理面

友人関係、家計、アルバイト、経済的不安、相談、将来・進路不安等を通じて、学生生活と心理面の支援課題を確認する。

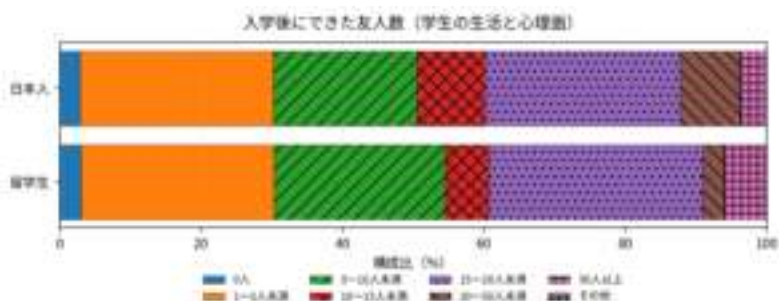


図 67 入学後にできた友人数(学生の生活と心理面) [2025 年度]《国籍別》

入学後に 10 人以上の友人ができた割合は、日本人が 49.2%で最も高く、留学生が 45.5%であった。最高値と最低値の差は 3.8 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

友人関係は学生の所属感や大学生活への適応と関連し得るが、人数が多いことだけを望ましいと評価することはできない。孤立の可能性を把握する観点では「0 人」や「1～5 人未満」の層にも注目し、必要に応じて交流機会や相談導線を整えることが重要である。

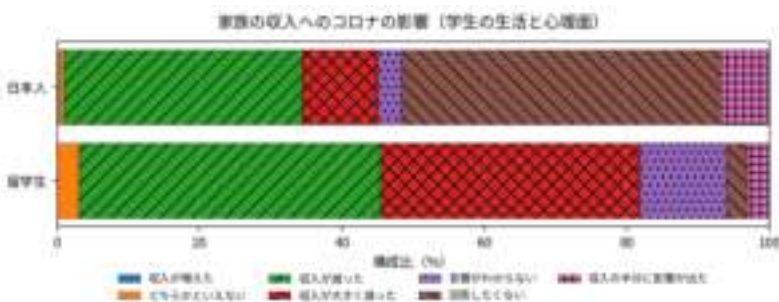


図 68 家族の収入へのコロナの影響(学生の生活と心理面) [2025 年度]《国籍別》

家族収入に減少方向の影響があった割合は、留学生が 81.8%で最も高く、日本人が 51.0%であった。最高値と最低値の差は 30.8 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

「影響がわからない」の割合も大きいので、この設問から家計状況を直接推定することはできない。経済的不安の設問と併せて、学修継続に影響する経済的困難を早期に把握できる相談・支援体制が必要である。

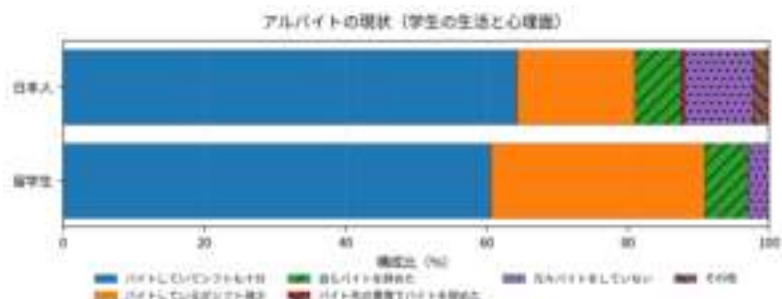


図 69 アルバイトの現状 (学生の生活と心理面) [2025 年度] 《国籍別》

「バイトしていてシフトも十分」の割合は、日本人が 64.3%で最も高く、留学生が 60.6%であった。最高値と最低値の差は 3.7 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

シフト減少や離職の割合は、学生の収入確保と生活安定に関わる。国籍差がみられる場合でも、雇用環境や学生個々の事情の影響が大きいので、学科特性だけで説明せず、経済支援や相談制度への接続を重視する必要がある。



図 70 アルバイトの業種 (学生の生活と心理面) [2025 年度] 《国籍別》

日本人では「飲食業」が 43.1%で最も高い。業種構成には国籍間の違いがあるものの、飲食・販売接客が主要な就業先となっている。

留学生では「飲食業」が 45.5%で最も高い。業種構成には国籍間の違いがあるものの、飲食・販売接客が主要な就業先となっている。

アルバイト業種は、対人コミュニケーションや社会経験の機会になる一方、勤務時間帯や身体的負担によって学修への影響も異なる。国籍別の時間数データと併せて見るのが重要である。

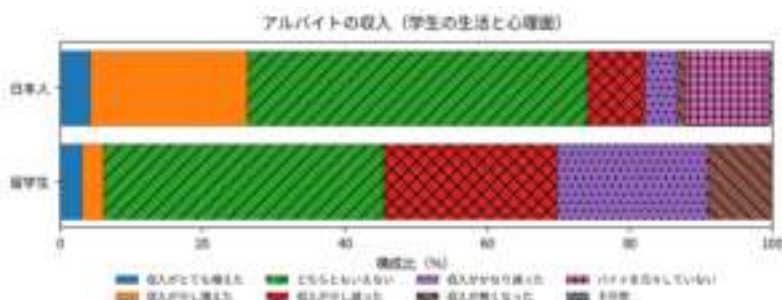


図 71 アルバイトの収入 (学生の生活と心理面) [2025 年度] 《国籍別》

アルバイト収入が減少・消失した割合は、留学生が 54.5%で最も高く、日本人が 13.8%であった。最高値と最低値の差は 40.8 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

収入減少は経済的不安と関連する可能性がある。学業継続に支障が生じる前に、奨学金、授業料支援、学生相談等の情報へつなげる仕組みを分かりやすくする必要がある。

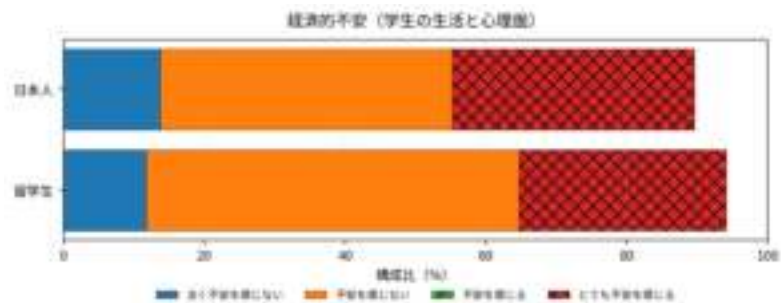


図 72 経済的不安(学生の生活と心理面) [2025 年度]《国籍別》

経済的不安を感じる割合は、日本人が 34.4%で最も高く、留学生が 29.4%であった。最高値と最低値の差は 5.0 ポイントであり、国籍間の差が確認できる。

いずれの学科でも経済的不安を感じる学生が一定割合存在する。国籍差だけでなく、全学的な課題として捉え、経済支援情報の周知、相談窓口の利用しやすさ、アルバイト負担との両立支援を検討する必要がある。

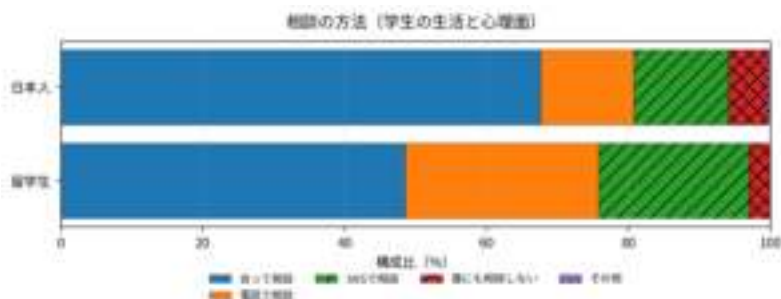


図 73 相談の方法(学生の生活と心理面) [2025 年度]《国籍別》

社会福祉・経済政策・多文化コミュニケーションの横計がそれぞれ 105、171、214 と記載されており、他の国籍別集計で用いられている 171、214、105 と一致しない。したがって、この図は原資料記載値をそのまま掲載するが、国籍間の厳密な比較・順位づけには用いず、原データ確認後に再集計することが望ましい。

「日本人」行では「会って相談」が 67.6%で最も大きい。相談手段として対面が中心であるという分布は読み取れるが、分母の不整合があるため、学科固有の特徴として断定することは避ける必要がある。

「留学生」行では「会って相談」が 48.5%で最も大きい。相談手段として対面が中心であるという分布は読み取れるが、分母の不整合があるため、学科固有の特徴として断定することは避ける必要がある。

国籍別の総合的特徴と改善課題

(1) 社会福祉学科

社会福祉学科では、授業の意義説明、課題指示、グループワーク、専門分野の知識、コミュニケーション力などに比較的高い肯定評価がみられる項目がある。とくに対人援助や少人数・参加型学修と親和性の高い指標では強みが確認できる。一方、外国語力、グローバルな問題理解力、データサイエンス力などでは相対的に低い項目があり、専門教育の強みを維持しながら、データ活用・国際理解・汎用的能力をどのように補完するかが課題となる。改善にあたっては、福祉現場の事例データを用いたデータ分析、外国人利用者や多文化共生を扱う授業、ICTを活用した記録・支援計画作成等を専門科目と結びつけることで、専門教育から汎用的能力へ自然に接続する設計が有効と考えられる。

(2) 経済政策学科

経済政策学科では、文章を書く力、問題解決力、コンピュータを使う力、価値をつくりだす力などで相対的に高い評価がみられる項目がある。データ・政策・経営に関わる学修が、分析・表現・ICT 利用等の自己評価につながってい

る可能性がある。一方、授業をつまらなく感じる経験、課題期限遅れ等の行動面では、他学科より高い割合となる項目もあり、学修意欲や課題管理の支援が重要である。

改善策として、データ分析や政策課題を学生自身の関心と結びつけた PBL、課題を小刻みに提出させる設計、途中段階でのフィードバック、キャリア目標との接続を強化することで、能力形成の強みを学修継続・授業参加の改善につなげることが望まれる。

(3) 多文化コミュニケーション学科

多文化コミュニケーション学科では、英語による授業、外国語力、異文化理解力、グローバルな問題理解力、自分とはちがう国の学生との交流など、国際・異文化関連項目で顕著な強みがみられる。また、文章を書く力、コミュニケーション力等でも高い肯定評価が確認できる項目がある。一方、専門分野の知識や仕事関連の知識・技術などでは、社会福祉学科等より低い項目があり、国際性・語学力を職業能力や専門性へ明確に接続することが課題となる。

改善にあたっては、語学・異文化理解を実務プロジェクト、地域連携、企業課題、観光・国際交流等と結びつけ、学生が「何ができるようになったか」を職業能力として説明できるようにすることが重要である。キャリア科目やインターンシップとの接続を強化することで、学科の特色を進路形成へ転換しやすくなる。

全学的な改善提案

① 学科の強みを全学で共有する

社会福祉学科の対人・参加型学修、経済政策学科の分析・ICT 活用、多文化コミュニケーション学科の国際・異文化学修など、各国籍の相対的な強みを授業改善事例として共有する。

② 授業外学修を設計する

予習・復習、自主学習が短時間層に集中する項目では、学修時間だけを求めるのではなく、授業内課題と授業外活動を一体化し、具体的な学修方法とフィードバックを提示する。

③ 国際性・データ活用・キャリアを横断的能力として位置づける

国籍差が大きい外国語・異文化理解・データサイエンス・仕事関連能力について、特定学科だけの能力とせず、各専門分野の文脈に合わせた基礎教育を整備する。

④ 学生の不安を早期に把握する

経済的不安、将来・進路不安は全学的な課題である。1・2 年次から相談機会を設け、ゼミ、学科教員、キャリア支援、学生相談、経済支援を切れ目なくつなぐ。

⑤ 差が大きい項目は学年・属性を重ねて再分析する

国籍別の差は、学年構成、留学生比率、科目構成、実習の有無等の影響を受ける。今後は学科×学年等の二重クロスや統計的検定も用いて、差の背景を確認することが望ましい。

国籍別総括

2025 年度の国籍別集計からは、各国籍の専門性を反映した強みが明確にみられる一方、授業外学修、キャリア形成、経済的不安、外国語・データ活用等については国籍ごとに異なる課題が確認できた。重要なのは、国籍間の順位づけそのものではなく、なぜ差が生じているのかをカリキュラム、授業方法、学年構成、学生属性、支援制度等の観点から検討し、改善につなげることである。

今後は、今回の国籍別分析を学年別分析と組み合わせ、国籍ごとの教育成果と学生生活の特徴をより精緻に把握する必要がある。また、経年比較を継続し、改善施策の実施後に指標がどのように変化したかを確認する PDCA 型の IR 活動につなげることが望まれる。